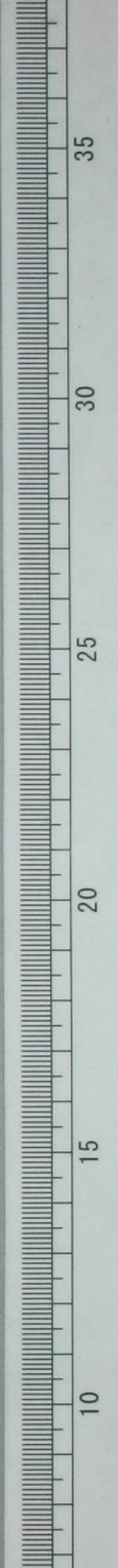


再
撰
花
洛
名
勝
圖
會

東山之部

一

113
528
1



神祇事務總督

有栖川中教職總主

近衛新前左衛門

中山前兼忠節

白川神祇伯資訓主

日掛り
六部雅樂

三十五

樹下石見守

谷本大和介

内国事務總督

正親町三条納言兼美之

德太子中納言兼則卿

越前兼藤原永朝

山内前將監兼朝

過 將 曾

大友保市三

田宮如雲

廣沢兵弁

神山左衛門

中根雲江

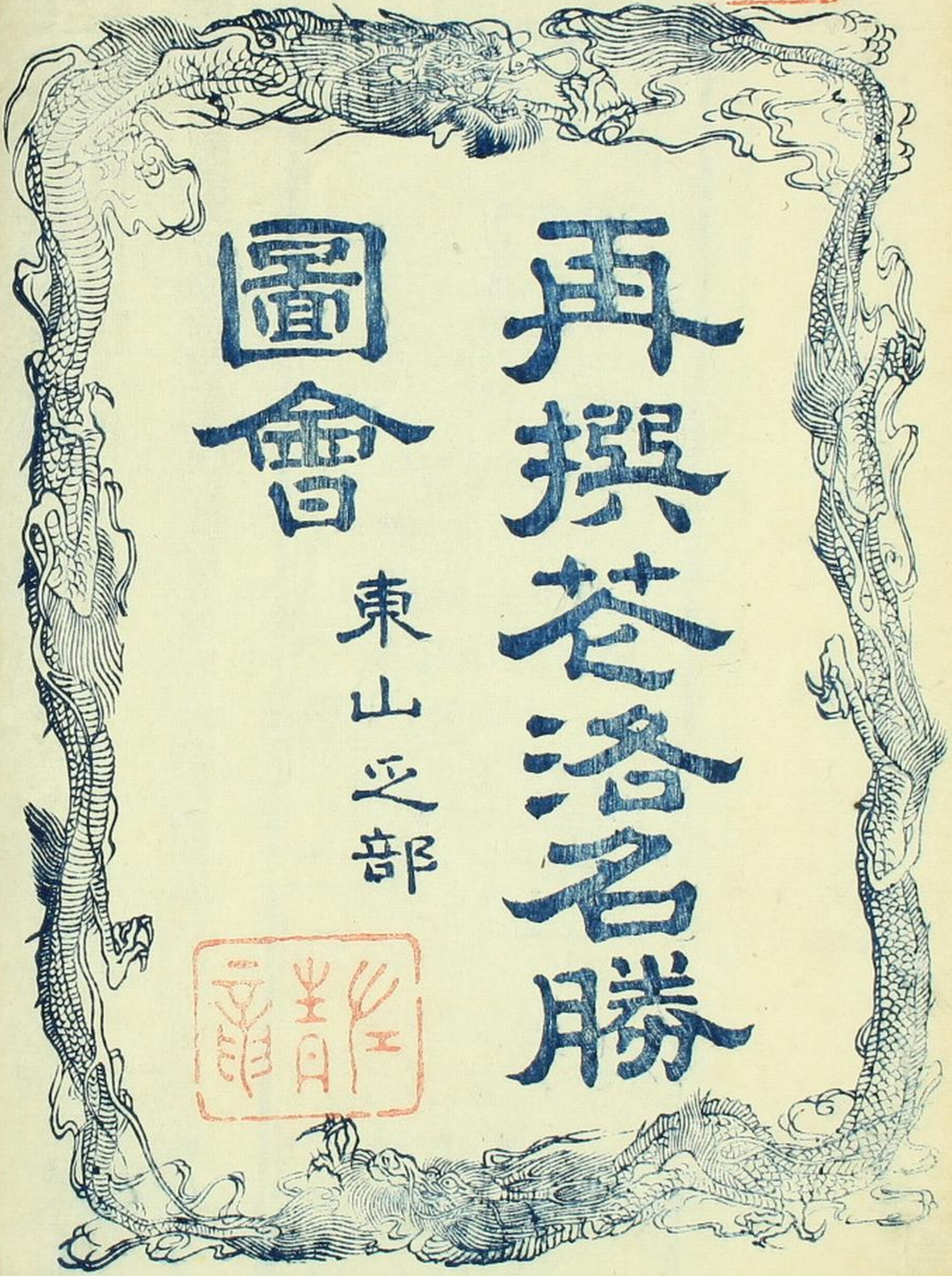
外国事務總督

山階常陸守兼親王

三条前中納言兼美之



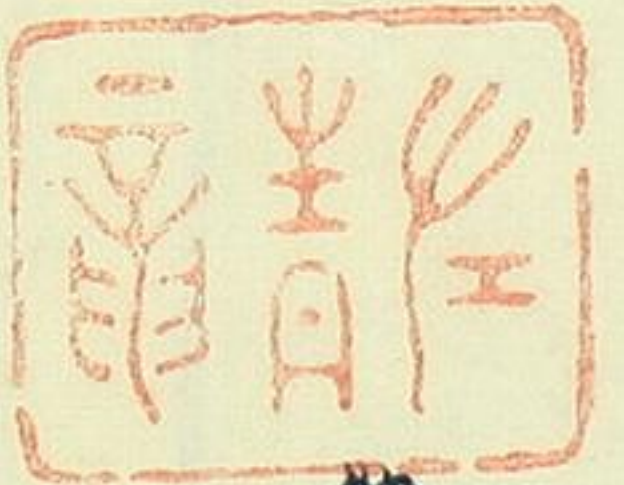
門 4 13
號 528
卷 1



再撰蒼洛名勝

圖會

東山之部



大正十五年
仙文館
發行

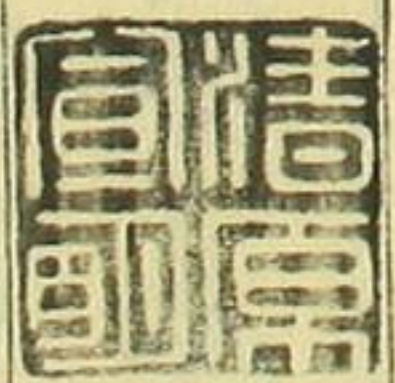
花洛名勝圖繪新刻本
其畫為板經手漫漶且名區
勝境不無增損隆替是心迹
索考搜函屏詳存更上本亦公
于世強使知不及四者之人是

113
528
1-8

跡未盡一至此如日規之播也
願溫友步新之知之得執矣
較之他國固給不可同日而語
豈了不契順之集裁多
知購求此國終未嘗
集汲馳法為紙價為

之貴也伴者法傳一之因
為書之者文久二年去
光朝日

凌陰山翁



豈因元凱浮梁日肯比白公治水年祇是
春風楊柳外鴨河綠漲玉虹垂此余丁巳
早春絕句也前年春 命清沽甯河尋
營四條新橋所以有此作爲戊午夏日津
久井翁以所撰東山名勝圖志見示首載
四條橋之書法訪于卷端因略錄一揮

以塞其責。翁多後好古。東西及南北各
有德將。陸績傳也。宋人所著。洛陽名園
記。尚時後。謂一園興廢。足以親一代隆
替。余於翁。此編名云。

蔣澤鯨侶作題



東山名所圖會序

はくよりちくび。そとあまの山のかげに。
ゆきやけり。うらふ水のうらふ。都の
ゆき。いづくともま。たじ。うらふ。ふら
ど。あま。うらむ。そのや。は。うら。た。う
うら。名。うら。うら。うら。うら。うら。
神。うら。うら。うら。うら。うら。うら。

秋をどのる垣にもあるべし。たのふに
しをかく巻のうらまをいふしきりなふ
いふ。世もこの書フミ○サト京はらうらまのよて
きさ山西こちふ乃くあふも。うらま
高。さうほよこせ板もあふも。かく
ゆらうゆらんと。今年もあふ物もあふ
也。たのふにうらま。ゆまのゆらうら

いふせきをかたて。加茂川のあづ穂。
よぎらうあふらうらま。あふぐ司もい
万がらうあふ穂。
清代のえぐらと。せうとやくきりしをせ
の。ゆらまゆらまゆらまゆらま。
安政のまをせらうらまのやうどの。都
よのゆらま。うらまゆらま。屋形よま。

北に... 年々... 純
ふ... 。

長門の殿人 為原若樹

長門の殿人 為原若樹

東山

例言

此編ハ洛東山川の壯麗を圖す... 雲上公子の座遊... 傷ら遠郷の風流韻士... 為小作... 考證詳悉を極む... 雍州府志都藝祿布山州... 名跡志山城名跡巡行志山城名勝志... 寄贈小随ひ餘白浅填む... 前板都名所圖會同拾遺の二書... 撰小係る當初世小行... 去こと凡八十年... 回祿小羅... 類癡小屬...

昔日の觀を改むるも間あまはく近歲諸州の名所圖會成
見ゆふ美哉競う開板し善を盡し續刻にさす
其本原たる都名所の沿革異同ありのなるは圖作の
粗漏之を他邦ふ比さるる事多し余是を慨歎するは
餘里技訂新刺せんや謀も老の頻る進む筆力の
及を亦るは奈何せむ因る先東山は部五卷と再撰し
微志を述はるむ

編首小四條橋を置たる故東山の中央あり河東第一は
繁華を接する通衢ありはなり今華戎爰ふ起り左右小
區別を設け南は縮荷三ヶ峯北は鹿ヶ谷如意嶽を限とし
凡て東山の封境は是他日次編の撰便ありんが爲あり
繪圖は其地小画者を括り真成画としり斜直横肆位置成
立の遠近を随ふ違ふ處無きと成得ば中にも小澤華岳

井上左水等既小下世の遺稿成存るもの是を繕寫
し加入し其餘半山東居等今画り所たの印章と註し
たをを鑿し誰氏の筆ありや成察は金一

方廣寺大佛殿の圖ハ前板竹原春朝齋が画り所小原き
祇園二軒茶屋及び雙林寺大雅堂の来由等以湘文法
儘を採用し是二士が功を奪ふあはるその苦心の湮滅せ
ざるん事を欲しかり
此書東山名勝を以題号としりもの近日書肆都名所全編と
改刺せん結構ありと聞くは其混同を恐るる君と稱成
異ふものみ幸し其舉に當らば此編をより東山の二隅を
補む事成度幾は

東山名勝圖會卷之壹

目錄 四條以北

東山全圖

頼陽變

同名義

賀茂川

同水源

四條河原納涼

四條橋

同祇園橋古記録及新造之記

西石垣

東石垣

戲場

大和路

祇園町

大和橋

仲源寺

兩止地蔵

神明社

高王廟

名産香煎造花等

井筒茶店

清川景樹記文

名法初音學神來世

西樓門

村社

萬春樓

祇園新地

神樂殿

祇園社

繪馬會

行文掛

神幸道

寛和年中祇園社古圖

愛深堂

神馬會

西天師堂

同二軒茶屋

祇園梶子

下河原

瘦伏社

祇園北林

神幸道

山王社

茶堂

紫雲水

知恩教院

勢至堂

佛間

蓮華藏

佛心院

大が丸

佛間

勢至堂

佛間

書院向

座禪石

集會堂

山門

下乘

知恩院宮御殿

太子堂舊跡

太子水

鐵盤石

花園帝陵

山鶴林

常在光院古跡

凡生石

明智光秀首塚

尊光法親王其外諸家塔所

妙見堂

朝日天満宮

東梅官

尊勝院

金藏寺

白川橋

金剛寺

青蓮院殿

栗田

栗田燒名産陶器

親實公之植髮堂

觀音堂

觀音堂

粟田天王社

觀音堂

神輿庫

御橋所

不動堂

觀音堂

三條小鍛冶

近宅趾

良恩寺

華頂山

石燈

石燈

將軍塚

佛光寺廟所

廟堂

阿彌陀堂

首孫刑部俊通墓

首孫刑部俊通墓

比丘尼坂

踏上茶廊

踏上清水

踏上清水

踏上清水

踏上清水

安養寺

一切經谷

別官未社

宇治橋

神女

別官未社

教向石

別官未社

宇治橋

神女

神女

神女

觀音堂

稻荷叢祠

三十三觀音小堂

宇治橋

神女

神女

行基座禪石

不動

三十三觀音小堂

宇治橋

神女

神女

觀音堂

稻荷叢祠

三十三觀音小堂

宇治橋

神女

神女

觀音堂

稻荷叢祠

三十三觀音小堂

宇治橋

神女

神女

觀音堂

稻荷叢祠

三十三觀音小堂

宇治橋

神女

神女

觀音堂

稻荷叢祠

三十三觀音小堂

宇治橋

神女

神女

觀音堂

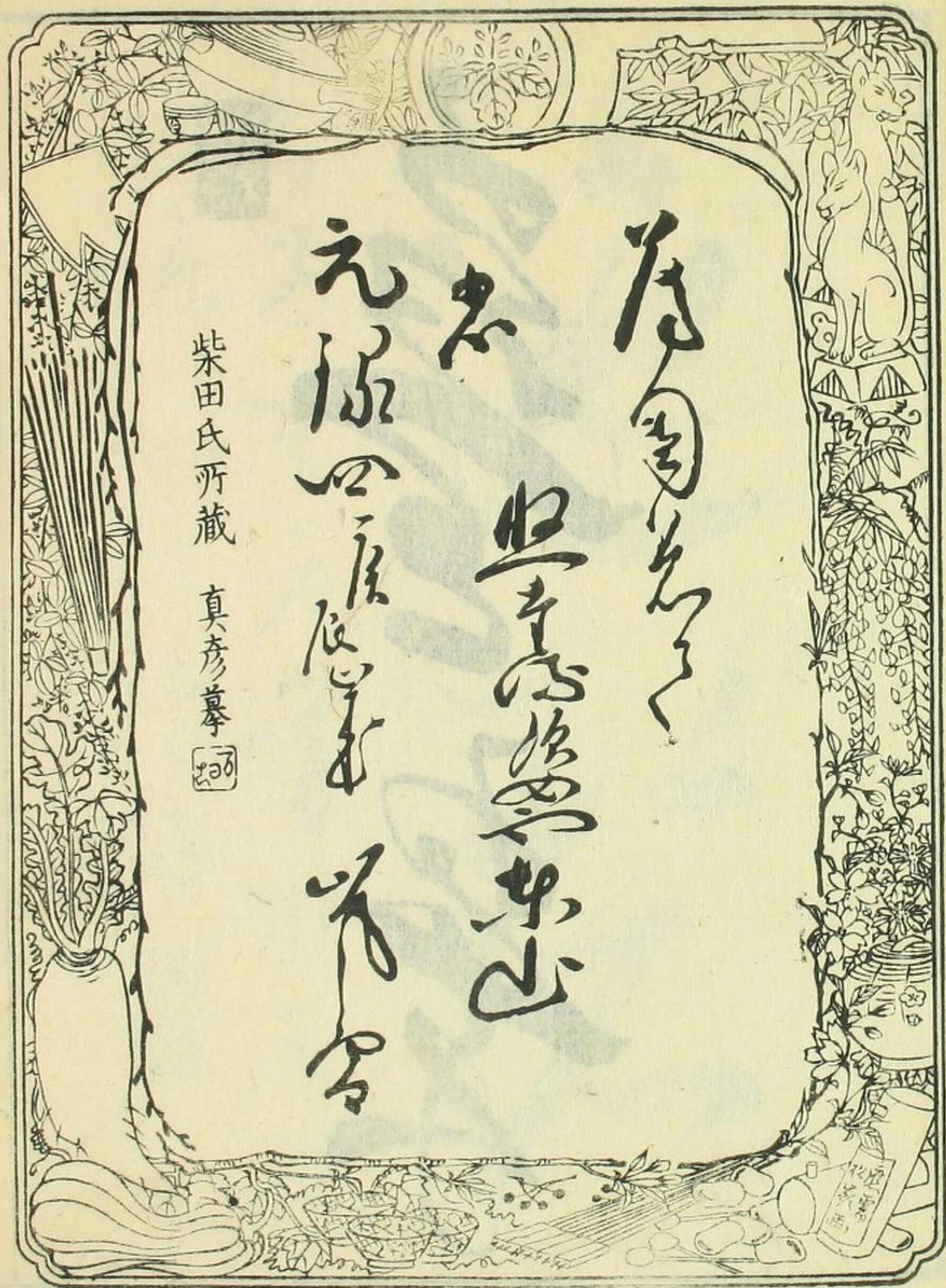
稻荷叢祠

三十三觀音小堂

宇治橋

神女

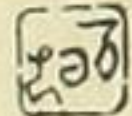
神女



乃國之
 忠
 元源四后
 乃令

柴田氏所藏

真彦摹



南禅寺 佛殿 山門 方丈
 歸雲堂 龍泉院 石燈塔 浴室
 金地院 御官 後伯英塔 唐門
 羊角嶺 駒瀧 柏樹堂
 西福寺 觀音堂 新宮氏順正書院 藏書峽 綾戸明神社 聖雷橋
 大將軍社 尊良親王墳 名家扁額 文庫
 十禅師过
 座禅堂 景烈祠 細川善隆塔 寧山塔 總門 獨秀峯
 孫時尚以下住人

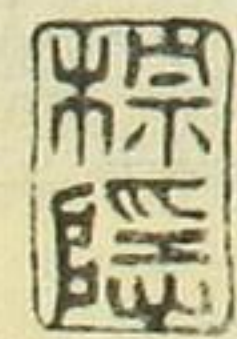


五穀之寶

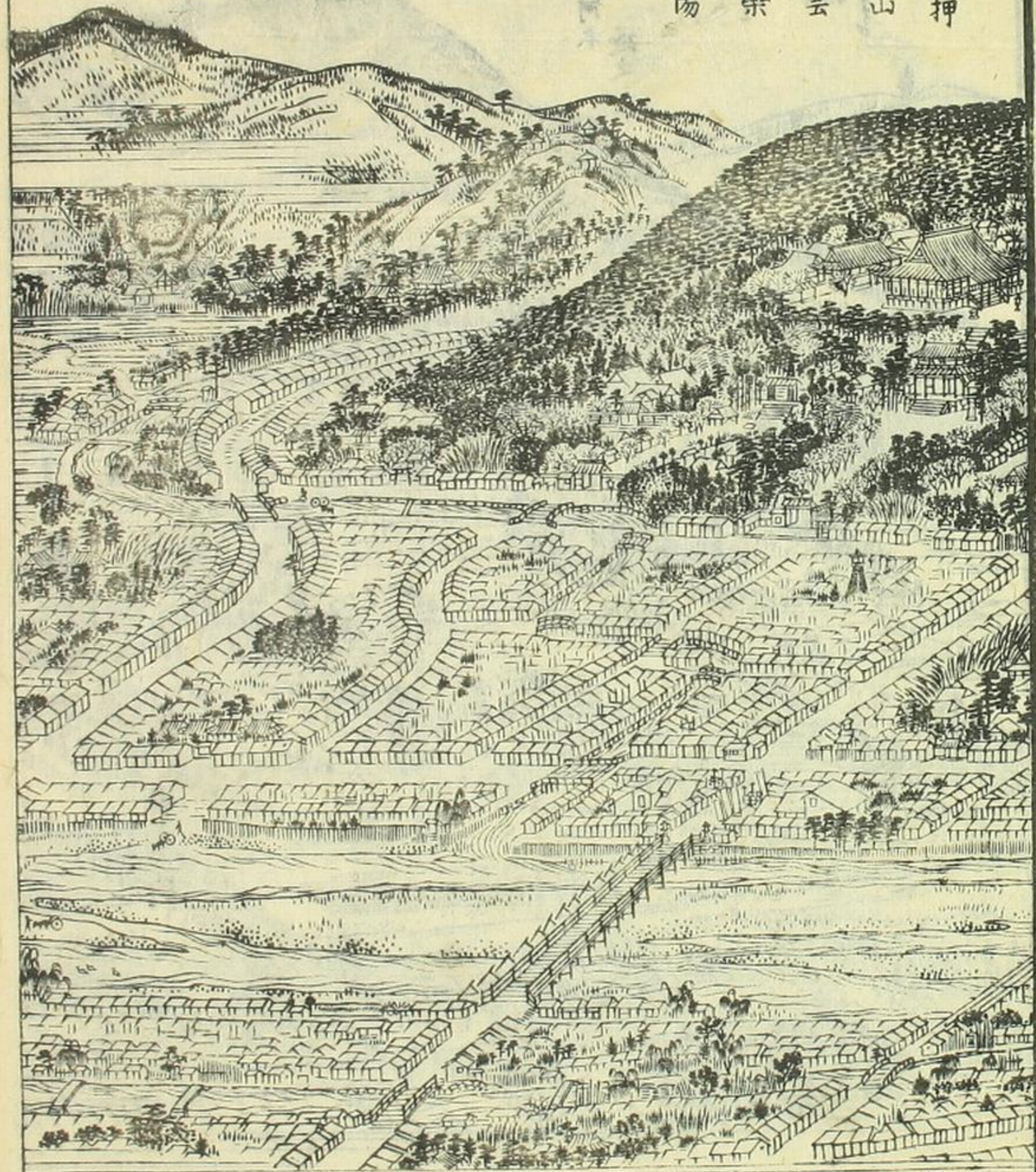
通玄

乃為中元書於之梅

梅



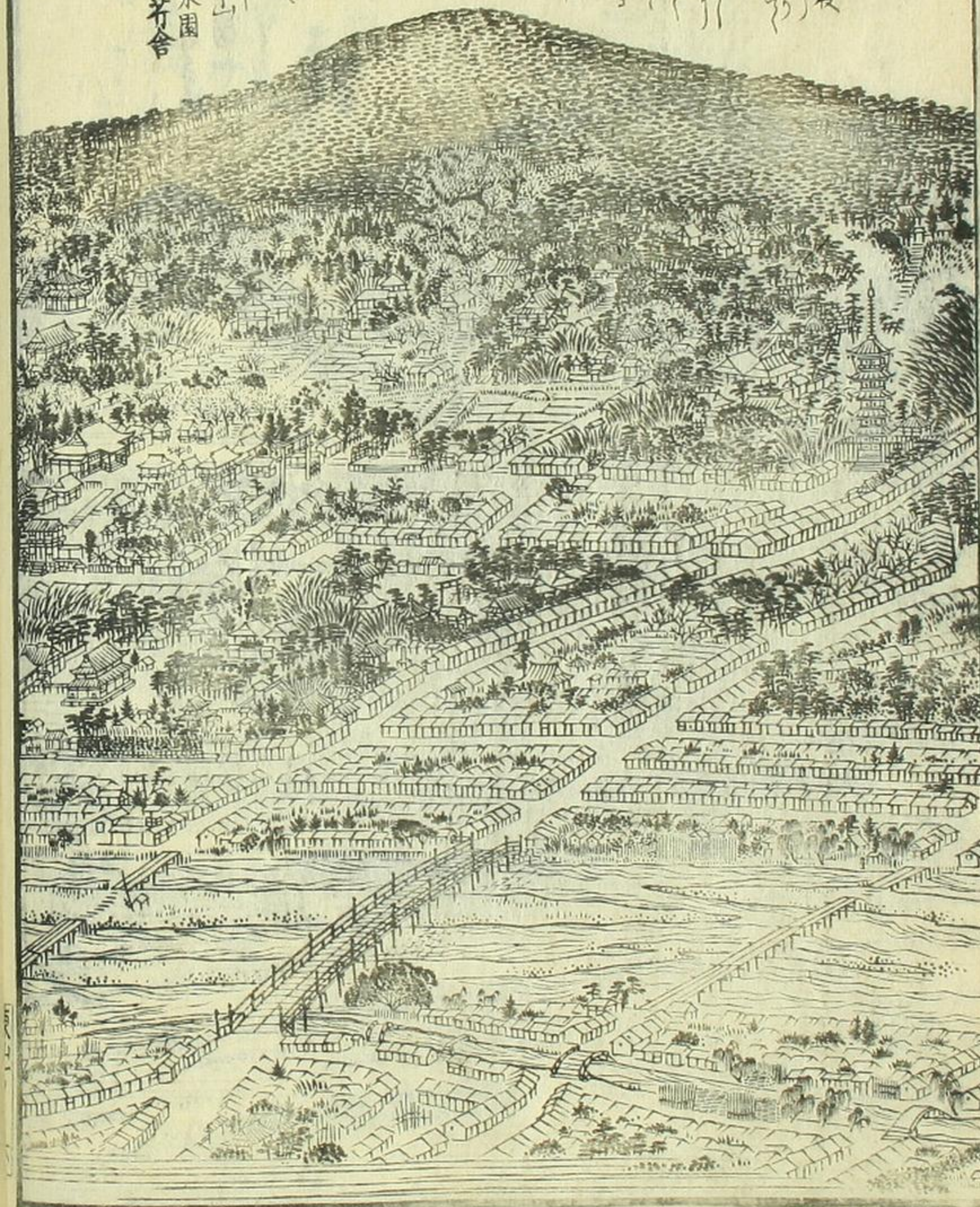
日搖簾押
午風暄山
已認東山
花事繁紅雲
寺々指點
供為長樂
高知恩
下賴山陽

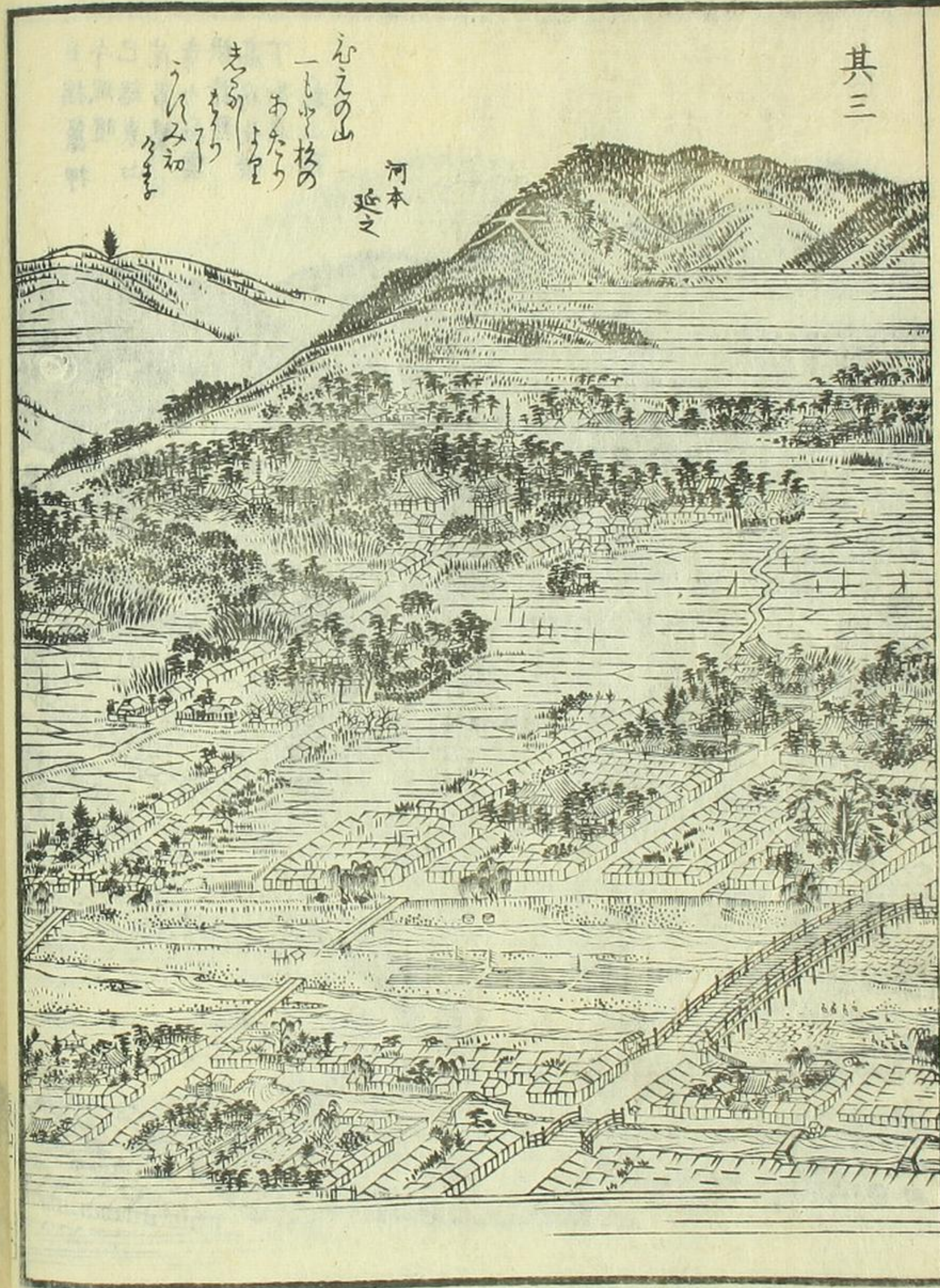
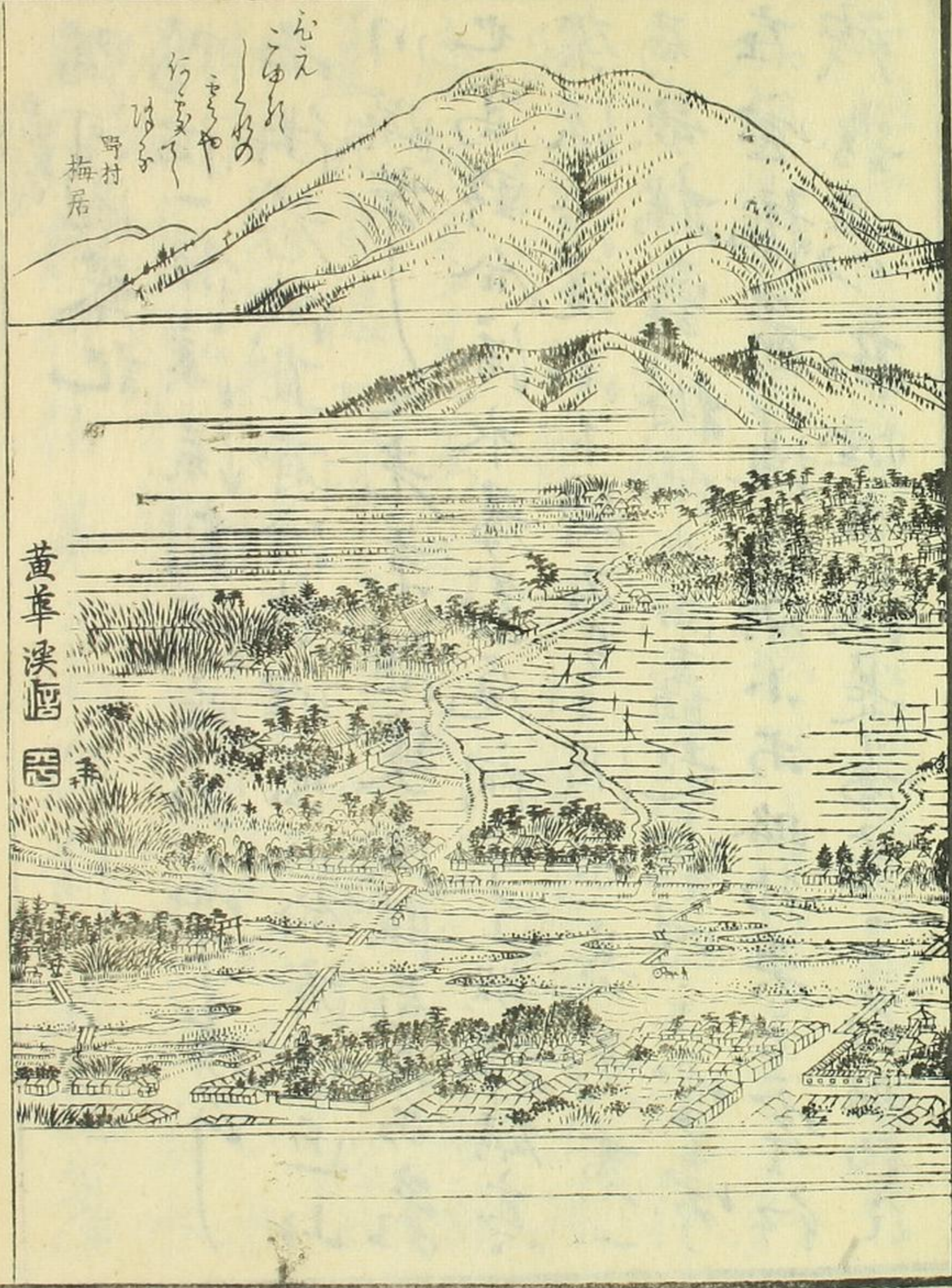


其二

九月十三夜
幸山陽
山陽の
おのれ
はるかに
今は
のち
八田
知紀

名月や
むらさ
まは
ひら
洋水園
若舎





燕

鴨河圖卷記

鴨河一條溪流劃城與山而下者千
而街巷所直有冷熱岬巒所俯有遠近山
川映帶之光景隨變成段局也亦象
也高野合流水為慈尾祠宇其蔽林旗亭
架流沿堤而下時又弓酒家是為第一
局歌樓舞榭依水西直聳起竅峰之雲常
在宮櫺前堤迤南小水略約夾之雪紅
殘粉與柳煙出沒是為第二局略約之

西開而分水膏魚之底與旁新之家有
水相對忽覺脰鯉臨階澆杯而膏新
之背名家起樓以面大川斜視大橋輪
蹄絡繹而華頂山翠霞歷其樓
臺各異是為第三局之以下人烟甚密
夏月自樓上望之每日入萬點燈焰
軟塵爭氣然而視之涼棚蔽磧區分水
石叙香鬢影繽紛於月色燈光之間蓋水
東紅粉什倍第二局狹斜大道產

為之相連過而東足指漸低其麓祠均寺
塔舊深可人則獨所望冬多山翠中
者而遊在石境其為山但稍南者狀頗
阻隘是為第四局隔而下瞰又得大橋如
第三局者橋西一支碧為第二局南分之
流派橋東南去度塔秋葉一飛橋霜
葉法為第四局所登之餘齋是為第五
局之勢雖變其實一水自山望城見水
明滅煙塵之際如蛇在草也如畫之

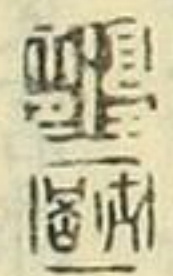
圖者宜卷多宜帖之取區別甚之源通
為一而然流通之中亦須具區別是□□君
所以崇此橫披圖又細畫如比夫鴨河可
遊其夥如此非貫穿出沒間通年之
力不可究討其雖系身係吏務難於展
出加宅依衙門在城西極或數月不到從
佳一到不道窺斑無能中其條貫也
故信工描寫多驪視唯一幅橫碧石評
觀則五局變態頓細畢備不必理杖

挈尊出城過橋而某丘某水生可指
點而其僅素履之數尺其各插之以薄
領向時出偷視如卷軸重大則不係卷
舒有礙予目焉其用意若矣余鄙人
字京者然知愛鴨河風景再三僦居而
經河榮亭在所謂二局三局之間而身
無羈絆得溯流上下肆快尋披衣不疑
為君津——道之云
乙酉夏秋十又三日山陽外史賴素書于

三楸村僑居山紫水明處



先人嘗為亂高翁書此圖記頃翁摹圖上
梓因使復摸其書併刻之記云此圖宜卷
不宜帖以帖區別而卷流通今所摹刻更卷
為帖古典記所言及焉差觀畫猶讀文者
逐段求之可領一篇觀畫者從區別得流通
亦可盡全圖之勢則卷與帖何擇此其所以不
必拘記支邪不肖復識



雪後望東山
風雪初收好放眸牛王廟畔使人留
圓山華頂高低樹擎出仙家白玉樓
東山花樹歌贈六如上人
洛陽城外鴨川流川東花木映青樓
青樓直接牛王廟桂殿蘭宮佳氣浮
東風徐傳鈴索響神多是屬春遊
花頂山門與雲齊金榜照夜望不迷
鸞翔鳳舞青松外紅蕊粉葩錦作蹊
圓山本自香火場何歲變作歌吹鄉
蒙家張宴無虛日簾幙風撲沉檀香
少妓寶釵金翡翠妖童羅襦錦鴛鴦
鴛鴦翡翠芙蓉帳玉饌桂醅琥珀觴
只道妙舞堪悅目寧知織歌能斷腸
長樂雙林花天地香霧濛濛不見寺
葛原已入闌闌中菊水僅存牆壁裡
榮枯千年真陵谷豐王霸圖留遺蹟
高臺今覩丹青新啼鳥弔古開花繹
開花啼鳥簇綠霞靈山亭子眺望遐
繡陌三千連宮闕碧瓦粉壁十萬家

江村綬

全

萬家春樹帶暖烟遲日好尋清水邊
峻嶒悲閣花間起春遊何處不可憐
可憐春遊春將暮棹棠踟躕花滿樹
真勝寺畔歸去來陌上香泥落花雨
別有藤花掛松枝恰似天女華鬢墜
藤花繹綿春不住東山花樹能幾時
鶯夢蝶魂人間世往事茫茫鬢絲絲
何若已公第屋下東山依舊翠落眉

中嶋規

賦取愛東山晴後雪
花開每言花似雪雪來又喜雪飄花
花之可愛不須譬雪之可賞又何如
行樂東山四十週詣盡花雪誘風流
昨結色界春風夢今趁玉戲無上遊
地隨其時換其景到底延人等解愁
雖等解愁有不等清比富艷更覺優
蹈瓊碎瑤元高逸戀香憐影皆冶柔
况是歌吟吹葦障窟糟鼻肉氣撲鼻稠
老來持心冰蘂均耻為謝安拜後塵
一夜風緊凍雲走卧後晴雪示清新

紙窗撫枕喜不寐
蠅行蠶食聽來句
斯頃天曉更點盡
先仰東山白嶙峋
嶙峋慣說三十六
一般化得酒爛銀
此時不類平生者
一味清寒入詩神
恰似嬌翠媚黛子
一旦僂去朝玉真
我亦對嗟如換骨
無復少壯舊惡因
惡因屏斷今如此
初葺冷峭堪作倫
不喫苦茗不呼酒
東山妙景歸一身

平撫群蠻不藉筇嵐光一一撲眉濃

前人道破全都景軟翠連東有卧客

賀茂河一名東川或鴨河鴨羽川云水源ハ洛の北山貴布祢川岩屋川以下の諸流合京師の東郊と過ぐ名高き大川也往古より洪水の時ハ洛中へ暴漲汎濫一廢民の憂也白河法皇嘗て詔て朕が心子任せぬ者ハ雙陸の采賀茂河の水山法師のみ此故小大丹衷の願ハ防鴨河使此職を置中古足利家の代永祿年中霖雨降賀茂河貴布祢川いづれ成る万里小路ニ文字小押洛中河原成六檢斷人と驅催

普請せ夏室町殿日記見たの雍州府志云賀茂川北方雲畑より出水上村經上下此賀茂出その間石川蟬此小川等の名なり而て紀社の南於高野川と合れれ依り或は河合と稱と而二條三條の橋下と過ぎ大和橋の西小於白川と合云第四第五橋小枝橋等を經へ又桂川と合淀橋の下小至て宇治川と合終小難波津小出海入同書云斯川水源至清自ら中華渭水の清比と云高瀬川上二條の東上より鴨川を引け三條北の方より東南と流伏見の西と經京橋の西北につらこれ則角倉了意の堀所也帝都運送此船川なり御集乃々秋夕夜也此波の音かへと鳴此河也夫木ゆく花ちらういまさは夜の御月夜のか茂の河也流後撰さのの鴨の羽川はかと思へ久世に流雜長明無名抄云石川瀬見小川是々賀茂川の實名なり當社の縁奴侍王云新古今鴨社の歌合石川や怪の小河ははれ月入流成身わて心長明

舟中あはれなるやせし水邊の初春の柳の影はけきき
千種 有功御
松をひらき玉ははれぬひらきを海ぬかりの川に
全

一月樓ふまみくる時

先づいづれは河原の初春の柳の影はけきき
加茂川はけききいづれは河原の初春の柳の影はけきき
幸だんはけききいづれは河原の初春の柳の影はけきき
鳴つれはけききいづれは河原の初春の柳の影はけきき
誰かふ眉はけききいづれは河原の初春の柳の影はけきき
加茂川の小石はけききいづれは河原の初春の柳の影はけきき
のどろろはけききいづれは河原の初春の柳の影はけきき
若きはけききいづれは河原の初春の柳の影はけきき
加茂川の石はけききいづれは河原の初春の柳の影はけきき
文わはけききいづれは河原の初春の柳の影はけきき

景樹
全
全
直好
雪臣
祥重
信美
長峽
惟貞
豊城

不著荷花不受舟樓樓住在岸東頭
只應萬解臘脂水瀉作潺湲一道流
中鳴規

三都春曉之一 加茂川

雪白花梢鳴綠波東山欲曙露坡陀
樓閣閣豪華海猶瑣春雲好夢多
全

鴨川原出于葛野郡畑村至車坂
與諸溪流合為一傍三十六峰南
走入淀川平時可揭及春漲秋水
則使河伯拊舞開豐公嘗分派其
原爾後暴漲不復如古所謂三害
之一也嗚呼豐公可謂能治其本
者矣今茲官起役浚之都人助
功每街出車錦綺張幟扮裝爭美
舞踏運土昭代壯觀僉幸寓目

紛羣助役子來民舞蹈狂顛簇鴨濱
東客初疑何祭典彩車運土捲紅塵
靜軒

四條河原納涼

六月七日之夜より十八日の夜に至る四條河原水陸寸地と漏るは涼と
並へ帯と設く良賤般樂は東西の茶屋挑燈と張る行燈とかけ
恰も白昼の如く是は川原の涼と云ふは是遊戯の納涼ありは諸人小名越の技と
なすやんとの神慮なるべしは十三日の夜に至るは祇園の宵宮と云ふは

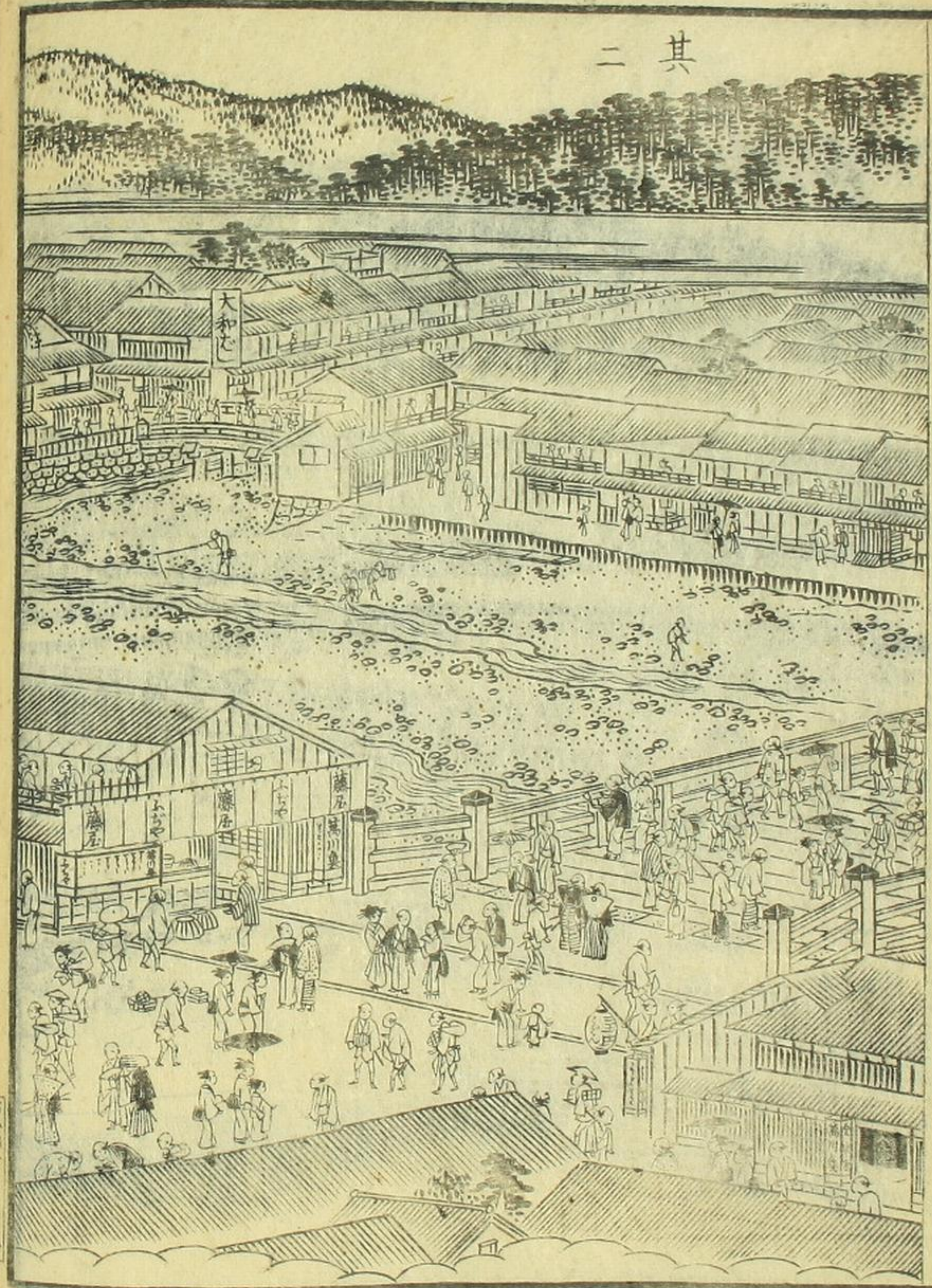
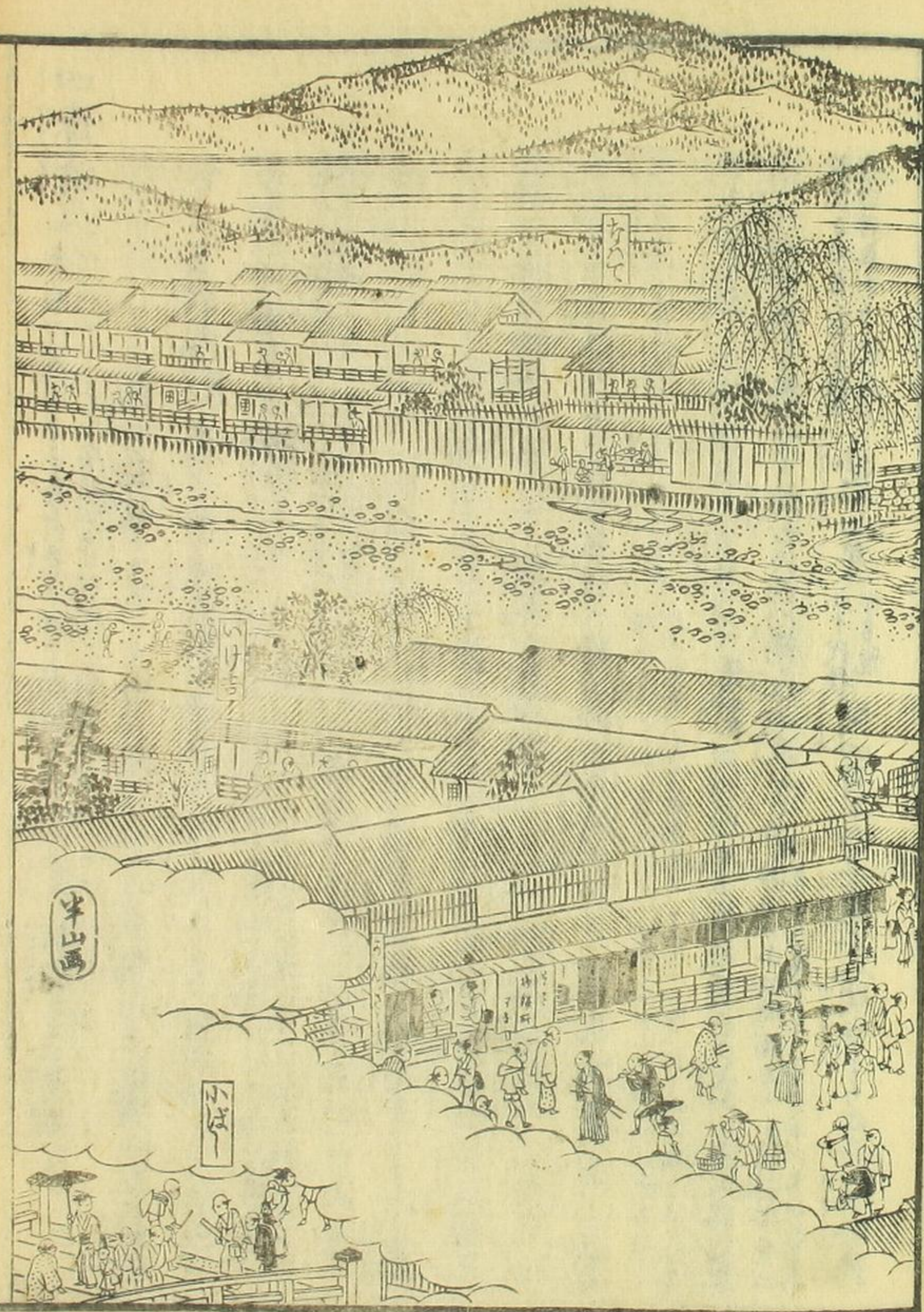
鴨水納涼之夜遊自六月七日至十四日為最盛矣
相續至晦日夜々四條橋南北涼棚茶店鱗次極比

かき川や維やわたる星は夕
鴨川やちりり啼く九條まぐ
かき川の河原に
うも川北より都の天竺川
かき川の銀の岸に
都はるかき川ありて夜をく非
かき川や三條まぐかき川は
若夢
士朗
樗堂
月居
魯隱
蒼虬
梅室
全

兩岸一帶皆蚊館分茶酒鋪羹店雜錯其間小脚店
則有泥鰯團魚之羹紅鬚青鱗之鮓諸色海味諸色
素食下酒下飯零碎作料不托水引河洛合羹胡餅
餃子牢丸包子糖糕糍糕諸色糖果西瓜餅瓜林檎
杏桃楊梅諸色水菓琉璃店則魚餅葫蘆鼓鑼鐵馬
燈碗各色盞碟雜貨則煙管煙袋各色摺扇團箆梳
篦髮朶釵朶香囊彩勝水上浮紙畫兒遠視畫凡兒
戲之物泥孩陶犬惜千千額叫子之類名件甚夥不
可畢數伎藝則走索戴竿吞刀弄丸藏擲劬斗傀儡
角觥口伎影伎獼猴猫鼠之戲演史學鄉談說諷諾
種種無所不有竟夜火炬燭天絃歌鼓吹嘈嘈鼎沸
驩笑海湧遊者不覺連旦

豪華萬種付潺湲即是我都銷夏灣
恰々連宵無一雨綺紈絡繹不知還
曲曲清波月迎牀紅羅白苧坐吹香
水肌寧怕人間熱只為風流趁夜涼
轟鼓繁絃徹五更戲臺擲比駐行人
相逢只道搜涼去滿耳何知有水聲

畫餅居士
全 全



四條橋

四條通加茂川よりなる長さ五十間中三間石柱の板橋より高欄つき
石柱敷四十二本安政四年加茂川御凌の時架らるる所なり

往昔當橋は祇園四條橋と号し三條五條小等も官橋たり祇園社家條を記
録云鳥羽院七十永治二年始祇園四條橋為勸進聖沙汰且之云是當橋を

架るの監觸たり按りて小永治元年七十五代崇徳院を鳥羽上皇瘵し讀波國小遷
然とて政道の事多分鳥羽上皇つとせしむる則永治二年八近衛院即位の年也

故小此詔録は鳥羽院永治二年書よりしむる雨後十三年を經て破損ゆゑや
造替ありし見く久壽元年七十六代三月廿九日祇園橋を供養する百練

抄小見えたり又其後七十五年を經て安貞二年七月廿日風吹雨澤洪水溢
四條五條の橋流と落ると同書小見ゆ然る小兵範記小嘉應元年九月廿一日

已刻より召りて院を參り二條三條の末河水にづれ車馬通せし遣下七條の
末淺瀬を尋ねて參入と有按りて小三條とひく四條とひく蓋四條の橋なり

二年より前流失の有又百練抄小寛元九年八十七代正月四日去夜祇園西の大門前大路在家
南北西面地を拂り焼亡し西橋爪小及按りて小此時橋あり云安貞二

此間小安貞二年小損弘安七年閏四月十六日一遍上人関寺より四條京極此
橋の再興あり宇多院

釋迦堂小入給ふ所の園小四條の橋ありと上人の繪詞傳小見えたり貞和五年
九十八代六月十日抖擻の沙門西源院本集四條の橋を濟さん新座本座の田樂

成合せ四條河原小棧敷を園八十三間小三重四重小組上物夥梅たり孫の

面をさ曲をれ忽ち棧敷二百四十九間倒打殺者五百人其外殺傷多

其次日終日終夜大雨洪水昨日の死人汚穢を洗流十四の祇園神幸の道と

清びと太平記小見たり按りて小弘安七年より貞和五年ま九十年也弘安の河の橋建の

大外記師其記曰應安七年二月十六日四條河原橋の事始云一向勸進僧の沙汰也

按りて貞和五年より應安七年ま九三十六年夜聖忌部伊紀翁著曰細川頼之の家譜小祇

園八感神院比叡山西塔の一院三千坊の數小入山門の衆徒憤あ時山王

の神輿を都小振奉るりと免給六其勢と祇園是小

ちし神輿し昇出大神人ま甲曾とらり四條河原の橋の左

右に穢のを拂し流し清く法螺を吹列障旗られ太刀を拔拂せ

云此四條橋應安七年小の渡橋をいぬる寶徳二年百三代後六月七日

花園院

祇園會之あり四條の橋三十六間九洲の住人正等入道を作る御興を渡り奉る
橋の上に荒菰を敷く供養す十月廿日禪僧千口相國寺南禪寺建仁寺の僧達也
東寺執行又寶徳二年六月七日十四日兩日に四條橋を還幸同以下此橋を地下正等
入道掛申四月より六月迄に畢ぬ橋新き小依く百と相遣より云祇園
寶徳二年十月十八日四條河原大橋成改曆雜事記小出按き小應安七年二月小掛り大橋
徹言記草根集曰四條河原の橋を渡り地に宝徳二年より

橋板の白く河に流る林に小た四方此に橋の板の

能の謡曲云四條五條の橋の上に若き男女貴賤都鄙色や花衣袖とぬれ米の
云謡曲八代世代奉元清の作り元清落髮の号世阿弥康正元年八十歳や浸然とて
徳の頃晩年の作り一箇の證とす

寛一年辛巳旧冬より夏小至す諸國人民餓死京城小來り死せる者數多成
知ら彼亡魂の四條五條の橋上於く諸山輪番大施餓鬼如是院
寛正二年三月廿二日欽命あり云四條橋上餓死亡魂のを建仁寺より施餓

鬼比命を管む諸山清衆勤修す云萬山編年精要出按き小宝徳二年より寛
正二年より九十二年に時橋猶あり

然ら其後何の頃小七び也知應仁の乱小七び也又同二年七月廿日の洪
水小流失せや永正十四年百五代後八月小至す四條橋断絶せを再興の紙
半銭の勸進を聖智徳小免さす所の古文書祇園社今尚存せり寛正二年より永正
十四年迄凡五十七年以永正の勸進を橋を再興せる下又天文十三年百五代後
七月九日大洪水や京中人馬數多流失四條五條の橋祇園の大鳥居流失祇園僧正
按き永正十四年より天文三年まで廿九年に然ら四條の橋永正年中小勸進を以て再興せる橋を又
同時小流失せ祇園の大鳥居橋の西合此神祇園の鳥居跡と稱せる所あり鳥居や加茂川の流
西の方に同せい故橋鳥居も天正五年百七代正七月八日四條の橋成就し供養あり
施食同向東山建惠日東福兩寺之を勤る久昌院建仁寺古記録小見えたと
按き小住持文彦永忠和尚の時小當る天文十三年より天正五年まで三十四年を以て同四條の大
橋を再興せる又後三条五条小官橋と造り故四條の自ら廢せる事あり
四條橋新造之記云上畧近年加茂川筋暴雨のたび毎小土砂流出る事夥く
次第小川流南に附洲出來く既小弘化三年七月七日の大風雨加茂川洪水
翌八日の曉三條五條の大橋同時小損下落ぬ次小嘉永三戊年九月三日風雨
あく五條橋小欠落猶も同五子年七月廿日より暴風強雨く廿二日に

朝ふたり俄に加茂川洪水漲出く三條五條の二橋損ト落又々八月十六日洪水
水何つて三條五條の仮橋を流失せしむ暫く往來絶たり即時小舟橋を掛る
刺さる坂岡度と聖護院村以下二條新地南白河筋まゝ一圓小暴漲一西川縁
高瀬川急水溢れ其餘波五條橋下至六條七條新地の家々を浸し
衆人難波及ぶ誠近代未曾有の水害なれば加茂川西川添町々申談下河
浚の事を此年秋願ひ奉り小宮政三辰年の春改めく 公より加茂川筋附
洲浚御普請仰出され五月中旬より始まり川上加茂大川川下鳥羽小川両岸の堰を高く
築あげ川の中央を深く掘り給ふ此より二條より七條まゝ川添の者共云ふ
及ぶ洛中洛外の町々より日毎に數千の人々競ひ出く土砂を持運ひ七月の初
至り速く御成効ありける爰に往古四條通の東加茂川大橋から祇園橋と
稱下流を宮川と云ふ彼御やろ歩を運ぶ大路より上々々の祭禮
小の浮橋を懸す神輿を以川の邊より昇出く水を滌き奉るも俗云御被
川の絶れ謂をうむむさる小本橋永く瘵と唯假初の小板橋なりと出水の

度毎に漂ひ流る夏をくかりゆわむ往來を街に衆人々を憂ふ
事久く且今度御普請の後此仮橋水行の障あり聞へ下古京宿老
及び祇園神輿轅町氏子從二条通町々其外祇園町同新地六丁の者も申合せ諸
人海度のたれ殊に祇園の大神此宜慮す叶ふと四條河原本橋新造は夏を
公願上り同年の冬御ゆる以蒙り即十二月朔日より取りて川中四
十二本の石柱を築立長さ五拾間の板橋を敷け中三間今茲夏四月は未
經營つた成就ね斯く吉日を撰四月廿九日渡初の式行われ此事小管より
下古京をけり祇園轅町并小産砂の地いより更まり京田舎の人々まで
歡びあふ事限られ實に花洛の二壯觀ぶ今より後加茂川筋をく洪
水の溢る事なく此橋の往來まじ盛んをく
西石垣四條の橋の西づり寛文八年加茂川の河上兩岸新に石垣を築せ給ふより川下
市中まじり石垣を築立く洪水の防ぎとせり故に石垣地名とす
當橋辺に皇都第一の繁花や貴賤の行人晝夜小群とす恰も鼎の沸けが
如さる程に青樓貸食權を列ね河海の鮮魚諸鳥の煮賣魚類精進の酒飯の

餐應温飽蕎麥切鯉饅頭菓子木果其餘新奇の食類店日夜々増盛酒
池内林小勝了たり就中生洲の樓(東山望中)月雪殊小絶景なり古此傍辺小雨
蛤(酒)店(り)招牌の行燈大雅堂の筆跡なり今其家絶た惜む事終り
東石垣 同橋の東岸といふ所西小川貨食家茶軒清樓娼家川面小建列正昼夜絃哥の
音たもりといふ甚おきなり武蔵野といふ茶漬屋あり是(年)古き店なり花浴
於(茶)漬屋の(門)前あり今尚傳(る)店小掲(る)筆のつ(く)左小記(せり)
馬琴翁の(口)演の顔あり今尚傳(る)店小掲(る)筆のつ(く)左小記(せり)
伏見

四條戲場 四條の橋の東あり延宝四年奉納の祇園の繪馬(南)側小三軒北側小三軒通四條の北蘭
一軒あり凡(六)箇所なり尚安永の(頃)北側小三軒あり東の芝居西の芝居といふ
則(三)箇所あり今西の芝居(は)びく南北兩座といふ
坊所(四)条中之町(と)号(し)芝居の左右(は)芝居茶屋軒といふ(は)板者の揃(ひ)の暖簾(と)ひ(た)
朝(り)入(る)見(客)と(伴)ひ(敷)物(を)懸(か)か(り)下(女)火(鉢)盆(を)携(へ)て(は)酒(食)と(は)若(婆)と(は)
入(る)引(入)行(く)夜(陰)の(打)出(し)小(至)る(ま)ず(は)静(か)き(は)備(へ)繁(昌)の(ま)り(なり)

南側大芝居 北側大芝居

大歌舞妓座なり 右小同一
名代 郡万大夫布袋屋梅之丞と云
名代 早雲長太夫亀屋糸之丞と云

歌舞妓の元出雲國大社の巫女小於國(の)あり都小登(り)神樂(を)轉(る)歌舞
是古(の)所謂(る)白拍子の類(なり)元神樂の變風なり時小永祿年中(は)江州の
浪人名護屋三左衛門(の)者(は)お國(の)た(は)歌舞妓(と)号(し)男女(は)立(合)の狂
言(を)仕(組)祇園社の南門(に)於(て)場(を)開(き)之(を)催(は)是(は)歌舞妓の(高)橋也(雁)加(舟)
尔後北野の(五)條河原橋の南(に)與(り)行(く)小豊臣秀吉(は)伏見城(を)築(け)る(に)沿(り)
給(ふ)時見物群集(し)坊(小)及(び)故(小)四條の河原(に)移(り)茲(に)遊(び)女(は)長
佐渡嶋某遊女の(姨)者(と)し歌舞(を)教(へ)并(び)能(る)藝(を)施(さ)し(は)良(し)賤
群(を)聚(め)し(は)見(る)誠(小)人の心(を)証(し)者(は)以(て)過(た)る(は)茲(に)女(は)藝(を)
禁(せ)し(は)後(に)又(は)小(娼)と(し)藝(を)施(さ)し(は)狂(言)盡(し)稱(し)男(風)の流(行)女
流(小)減(せ)り故(小)又(は)法制(あり)斯(く)暫(く)中(絶)あ(り)今(の)如(く)の風(を)衰(へ)
兼應二年(は)小村山(に)又(は)兵衛(と)し(は)者(は)四條河原中嶋(に)於(て)再(り)興(し)又(は)繩(手)四條の

北より一遂に寛文中今今の地に移り常芝居とす
雍州府志曰芝居の外門關比上高床を設け外小幕と張る其體城
樓不似たる故小櫓と稱し曾々板倉伊賀守勝重京兆尹の時櫓七箇を免
七箇所芝居の外を稱する事能く櫓をき者小芝居と稱し云々
狀七櫓の兩座此在余所々分れ相續し今猶繁昌とす
當兩座所謂歌舞妓の大芝居中三都の名能優常小聚興行
を以て間断を尤四時繁昌なりとべ別霜月の顔見世頭盛
中々豪富の左祖錦緞子毛氈もよみ米炭薪酒魚類と愛する所の能
優小贈了勾欄の表山如積上門を壓し街を填ぎ行人を阻む負
櫓所挾ま立々舞臺の燭臺棧敷の桃燈夜は村々看客の大
勢山の如く集ひ四面場上小萬燈を照し歌妓の揃町方の婦女美艷を尽し
群々言語小絶座附別合せ小手打連の名曲小數萬の耳と澄し嚴冬
の曉天と下陽氣充滿寒冷を知り其盛なる事三都小魁り

都繁昌記曰顔見世之一劇熱鬧極矣理當在大坂沃饒之上
而却盛于我清肅都下此亦一奇如江戸則固極其盛美吹屋
町堺町木挽町之三街劇部戸戶總以十一月朔爲履端如從
周正者供歲糕奉春盤臨街屋檐上作種種華飾爛燈檄明場
內亦有多少舊式莫不壯麗然我都兩劇之所以不相讓者在
座著手打之一事座著者謂諸優著坐于場面謁群看客之式
也手打者謂好劇之遊冶少年候諸優著座立其面前齊鳴拍
子木贊揚其勢焰也此輩皆良家子弟而拋煙華鄉之餘結社
稱手打連中例歲顔見世初十日間逐曉入場作此伎其狀頭
纏彩手帕脚踏紺黑或紫綠之襪子華衫必短文帶必權輕佻
浮泛之習公然不顧人嘲笑蓋其所自詡在拋財誤身呈痴汗
面之外宜美自昔人呼作癡物第一番然百年来不斷其種亦
屬都俗繁昌之一條耳凡顔見世之例四更既過櫓太鼓諸優

速上勾闌每一箇出右邊小幕衆從內轟之連呼阿梨也阿梨也坐通卷頭先進拜伏中央爾時手打連中輩出而當其前各把紫檀紅繩拍子木齊拍而節贊揚之新詞曲大抵倚三絃間用雜器要在助拍子木其音或急或緩或低或昂如流如逆如喚如應一索一勾憂憂切切翻飄砧飛拚之緊傲金聲玉振之優鼓動之妙有難以字色寫者一曲已了則優始舉首并掌而又自稱其名謝贊揚之辱且陳乞憐顧于全都之情語雖各有小異皆以乞滿場自隅至隅之御員履為結終一箇已退一箇又進至卷軸優老而止手打新詞之長短繁疎隨優家之甲乙自有區分如優童稱子役者使四五箇齊進座併而對拍之拍罷拍起兩刻許事了則諸優又逐次一拜而入幕去此式之於優家最為光榮所以皆著禮服肩衣單袴通俗稱長上下之正裝也如若女形則戴紫色小巾垂繡紅脩袂猶服長上下陰陽

不分之體此輩結習不可必尤

大和路

芝居の東より右に三條の橋より南を經て伏見豊後橋の通りを以て此道を經る南の方大和國小田原を以て期号なり尤此道方廣寺の前より大仙門前まで謂ふは此所を左右田圃や廣き繩手の坂彼小田原家あり故小元結と製するものも此住路傍小元結と手製一旅人おのれに今尚余風遺る此所の名物なる繩手元結の聞え世に高
按ずる小百瀬坂小祇園西大門の前の大路より康富記小祇園横大路のあり又盛京記小祇園西大門の大路なり

大和橋

大和路三條と四條との間あり是白河の流賀茂川に入る所なり大和路小田原を以て大和橋と云ふ石を以て造る橋なり此橋の北小辨財天町と云ふ所あり此古辨財天の社有
以上と外六里と稱し近年遊所再興あり

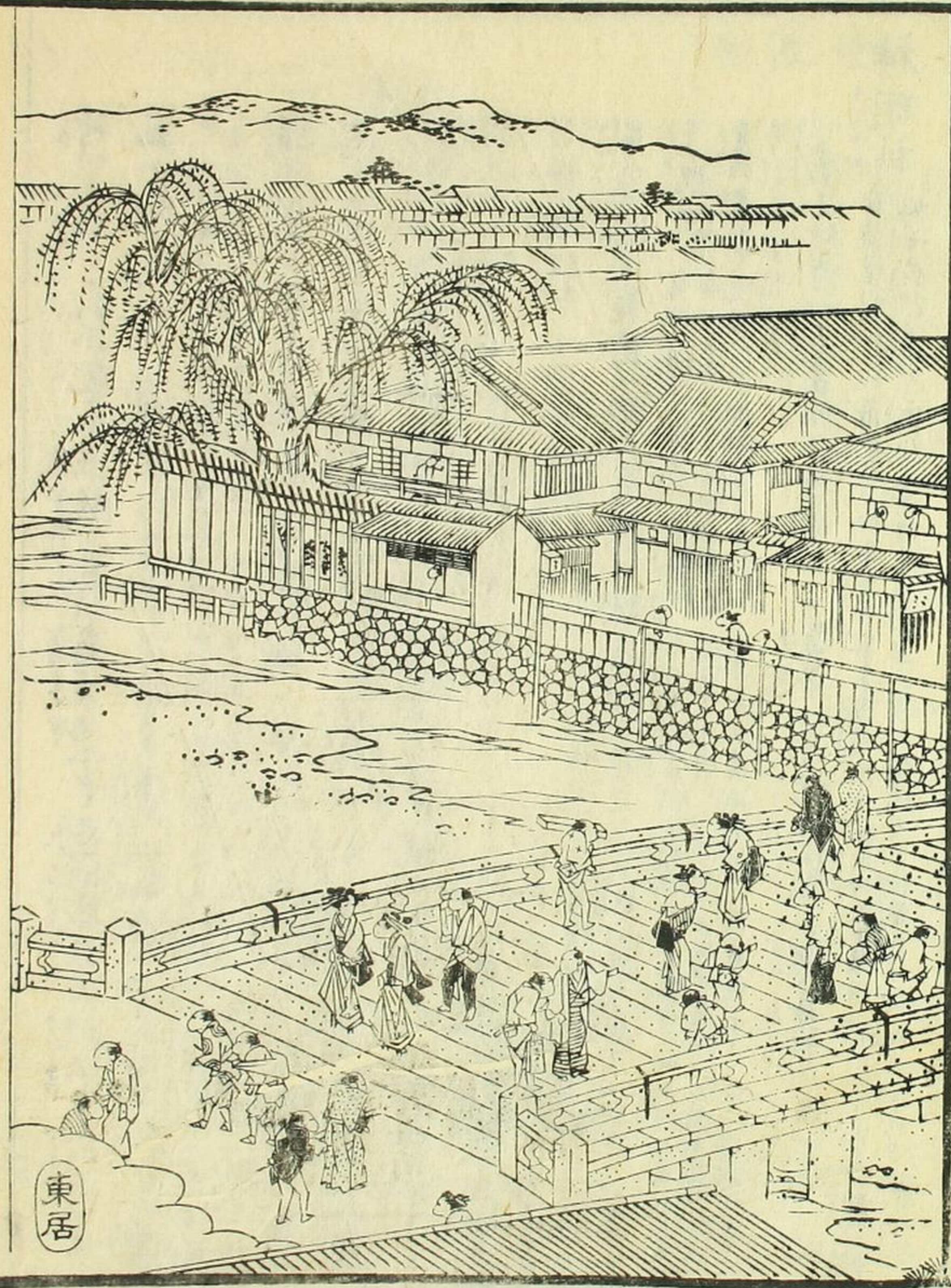
雨止地藏堂

大和路四條の東南の角あり中洞寺と云ふ或は仲源寺と云ふ開基詳かり傳云中華教化人塩瀬洋因建立の大檀越なりと云浄土宗小智恵院小属は

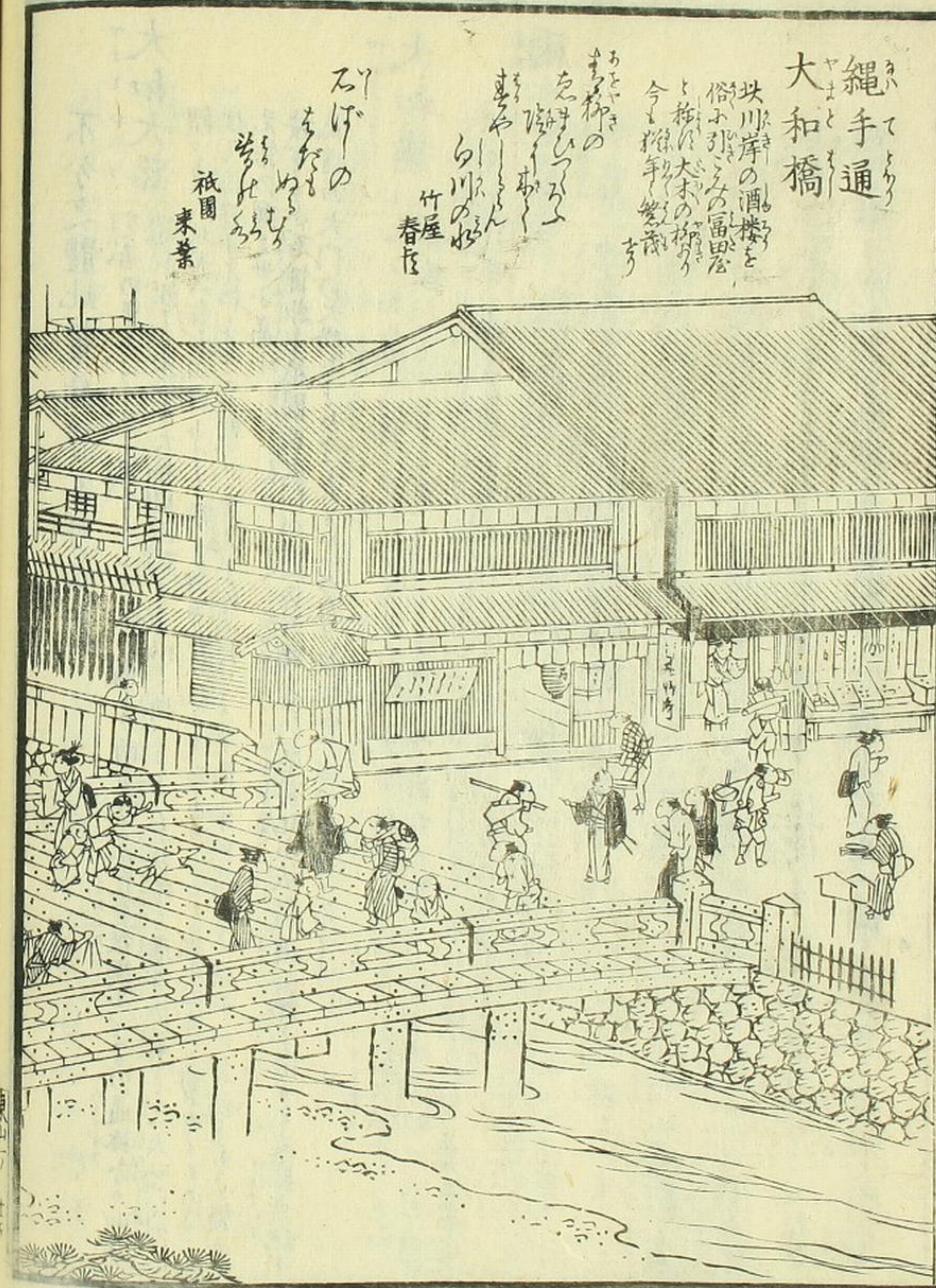
本尊地藏菩薩

大六の座像定朝作或は土中出現と云 股士 阿弥陀仏 惠心僧都作 行基僧正作 或は春日作と云

雍州府志云此寺舊四條東北の田間今は芝居の所小在故世小時の地藏と云寺僧傳云後堀河院安貞二年秋八月大風雨鴨河洪水漲出勢田判官為兼小命とく之を防ぐむ為兼忽ち異僧小逢僧謂らく此水入力を以てんれを防難一以河北小辨財天を勸請又河南小夏の禹の廟と建立一祭祀と勤修



東居



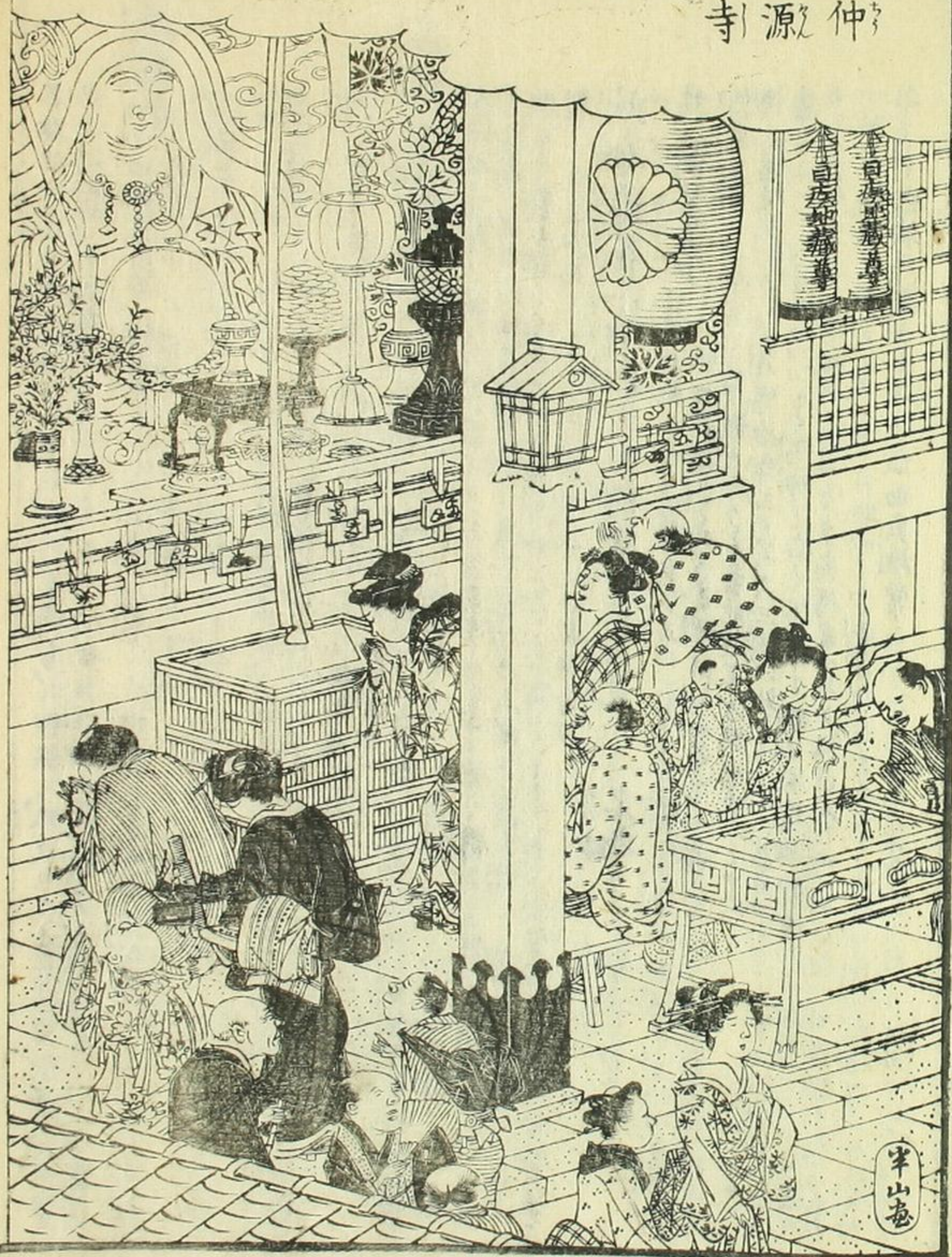
繩手通
大和橋

筑川岸の酒樓を
俗に引く富田屋
と稱す大木の柳が
今も橋手邊に
あり

石の
まじり
竹屋
春屋

祇園
末葉

仲源寺



半山庵

神明社

神明社 地蔵堂の西の角にあり伊弉大神宮を勧請して社近世大に破毀されしと祇園の妓婦女伶れども競い奇進寛政五年の夏再建しけり壯麗なる神殿と云

時水立をくろく乾くと云終見ば為兼思へく是地蔵尊の現出せり所なりと
 茲に於て雨所の経営事形水果して枯る其後兩社廢壞今其所を不知惜哉と
 云一説萬玉の廟近世至ア五條松原通河の東に在り云又四條の南鴨河の西中島近世に至る迄清明
 去塚と稱するものあり此辺夏の高玉の廟有云今更其地を掘りて井天の社則前より天松の北古昔有
 諸亦以尊前小眼疾を患ふる者祈願を懸ては靈驗たりたり病苦乎愈に
 故小世俗目疾の地蔵を稱す實ハ雨止の地蔵なり其故は往古此辺家居く田圃
 の間小此寺にりり畔の地蔵と云ひ時往來の衆人驟雨の時ハ此堂小雨宿りて
 雨止を待たせりふと雨止の号以蒙りせりと云然るを眼病の靈驗と云因り
 目疾と轉訛せりものぞ
 弘法大師の作の薬師仏が丈夫安置に傳云服士の千手觀音ハ東山雲居寺の
 本尊なりとも又説大江原柱橋院の本尊なりとも云云志孰是れをともし
 康富記云寶徳三年九月廿九日祇園横大路北類大仏の堂小於く菊のり一覽
 了奴云 是則當寺の事に元ハ大和大路の西の條の北類あり後世大和大路の東四條此
 夏の角王の像なるを世俗仏と云ふ風より其像をりり飾りて遂に地蔵菩薩と
 云ふに信ぜり

祇園町

名跡巡行志云傳云此祠曰云魚社此所有洲有大鯉隱入依救之其靈又為崇故祭之或云高王社也
四條通大和路の東に祇園石壇下の辺に街の左右に青樓娼家建つてあり登夜鼓歌の音なるに妓婦女伶東西に往つては頗る少きなり
山城名跡巡行志云此所古皆農家也中古清水寺參詣の諸人此為茶店を出り
三條繩手西側祇園町南側同敷下此と八間と高基寺門前此所近來亦遊所なり其田畠新家や成る
古の葉屋近頃まゝ云

名産香煎

祇園町小川を製する家四五軒あり九其製大唐米薏苡仁蜀椒陳皮茴香の類を海未一竹の筒ありし陶器に入れしを煎く是の所の名物なり
水茶店これ必以香湯を客に進む花浴の人専らこれを賞し遠近の旅客も是を求めく家主産くはさるる祇園香煎の名世高しは是を古賀志と云近年紫蘇の葉を製し高しは是を紫蘇香煎と云最佳なり

此余造花小町紅太鼓饅頭

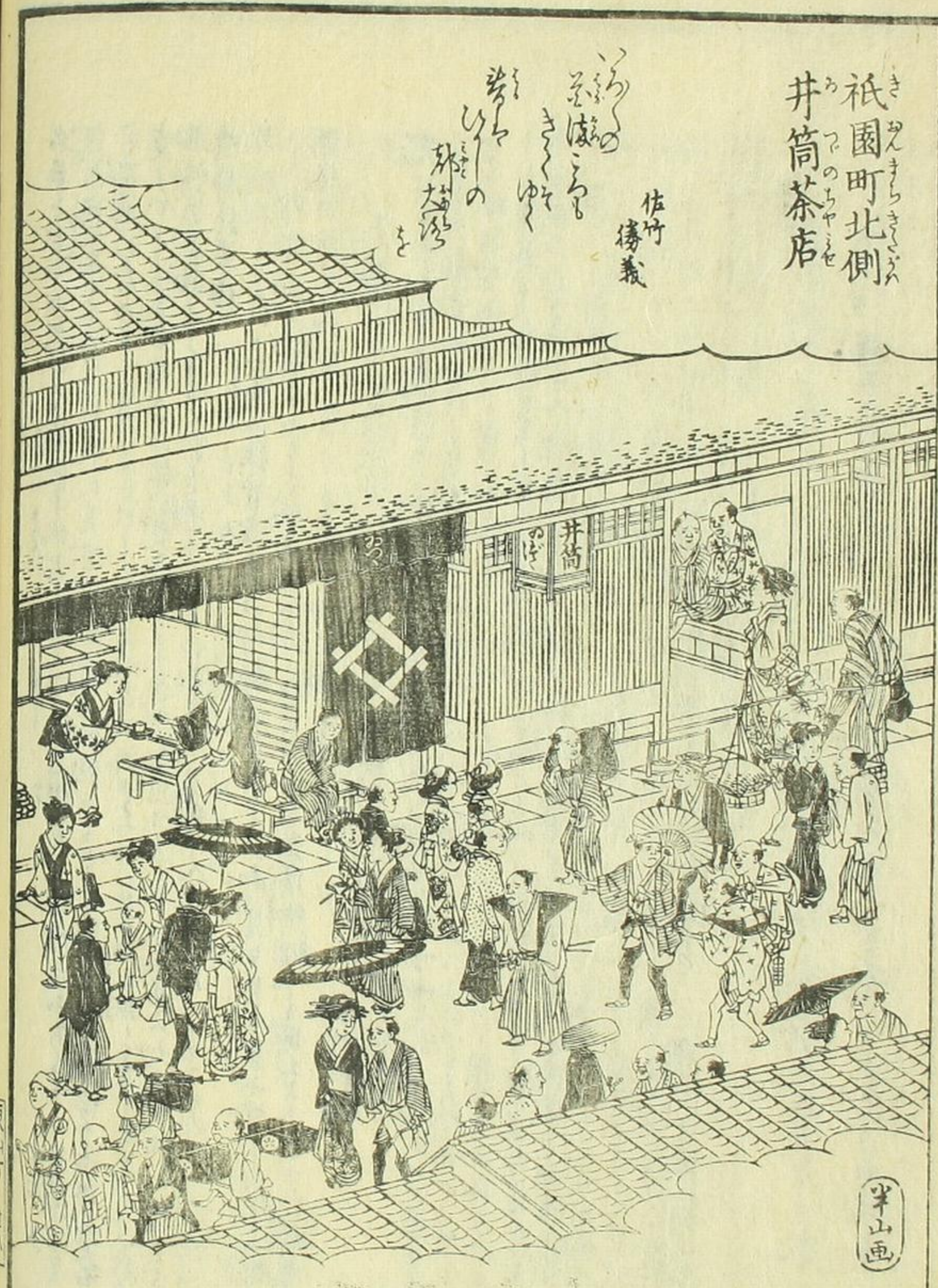
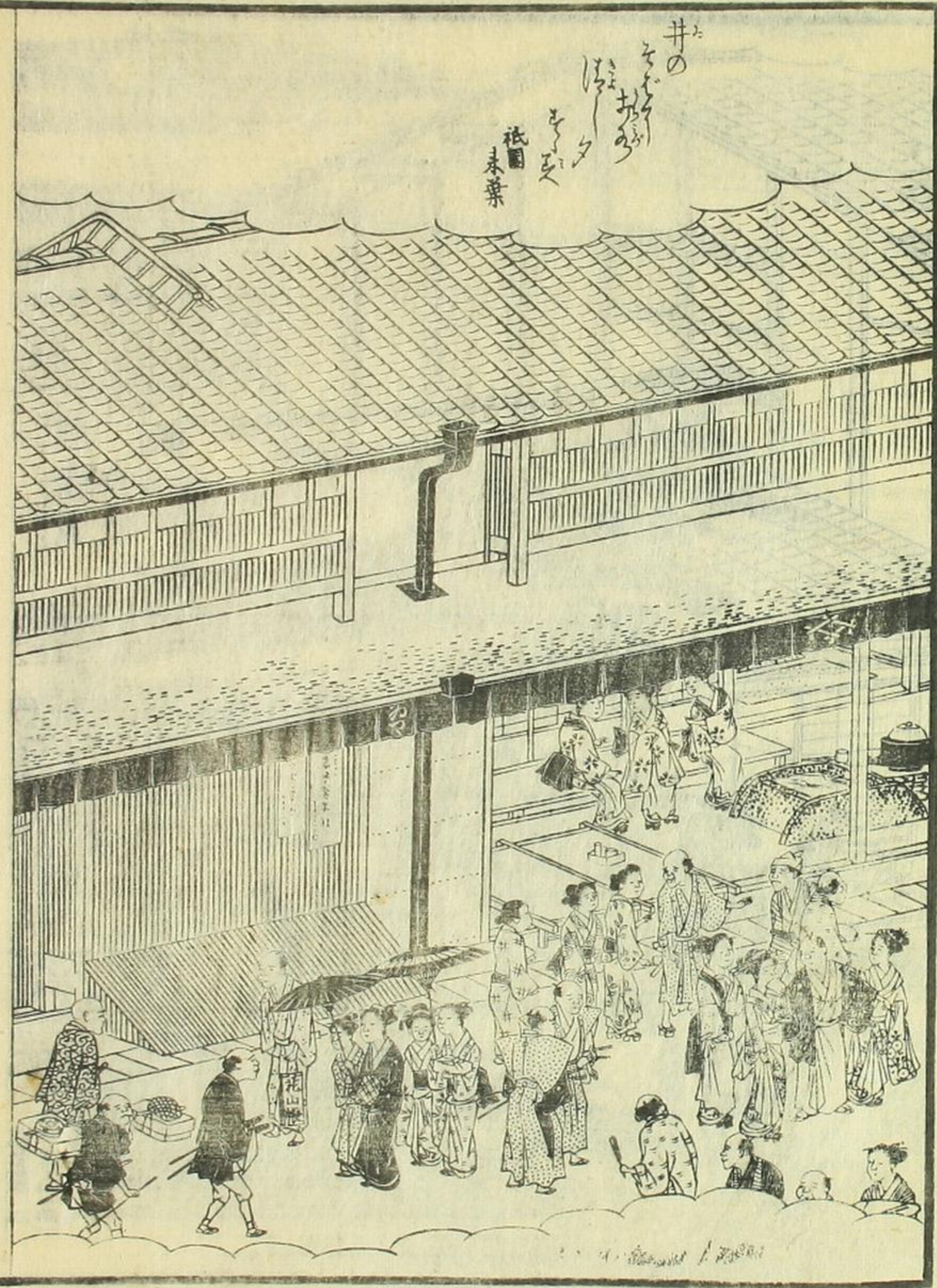
資来豆と名物なり繁榮あり
日所北側小あり表小自然石の大なる井筒あり傍に異様なる風燈小籠子と結構善美と云せし席敷あり古地遊宴の酒樓第一と云
傳云當井筒の中祖岸野治郎三と云三弦の妙手なり其名世に傳ふ家小三掉の三弦と蔵多一と初音と云し鳴神と名にこれ鐵乃杖花柳薔薇の名物なり
一軸と秘蔵は是又と云ふ古物なり尚傳来ハ次子記に又此所前の面二面應想文賣の画あり赤城の義士大石内蔵助良雄常々遊び治郎三と親しく以て音鳴神の

名器と云ふをいひて宴飲荒火の唱哥を作す治郎三小ありて東武小下を然る宿意と云げ自叙其忠肝義膽且風流なるも感ぜり命有り治郎三六石の遊薦のため書のこれ荒火の唱哥小洞をつけ名器の三弦を鳴くも此の復りやさし名高き三弦の更ふ美しき音を出せしは是ハ大石の列を悼む報情の器物なり悲しむものなり見聞の人袖をぬぐふなり
鳴神此畧傳
以鳴神と号する三弦は往昔或侯の御秘蔵を全し御息女鳥丸家小塚一たす折酒宴の折々津覽ありしは是も御自筆なり
今尚金時法あり

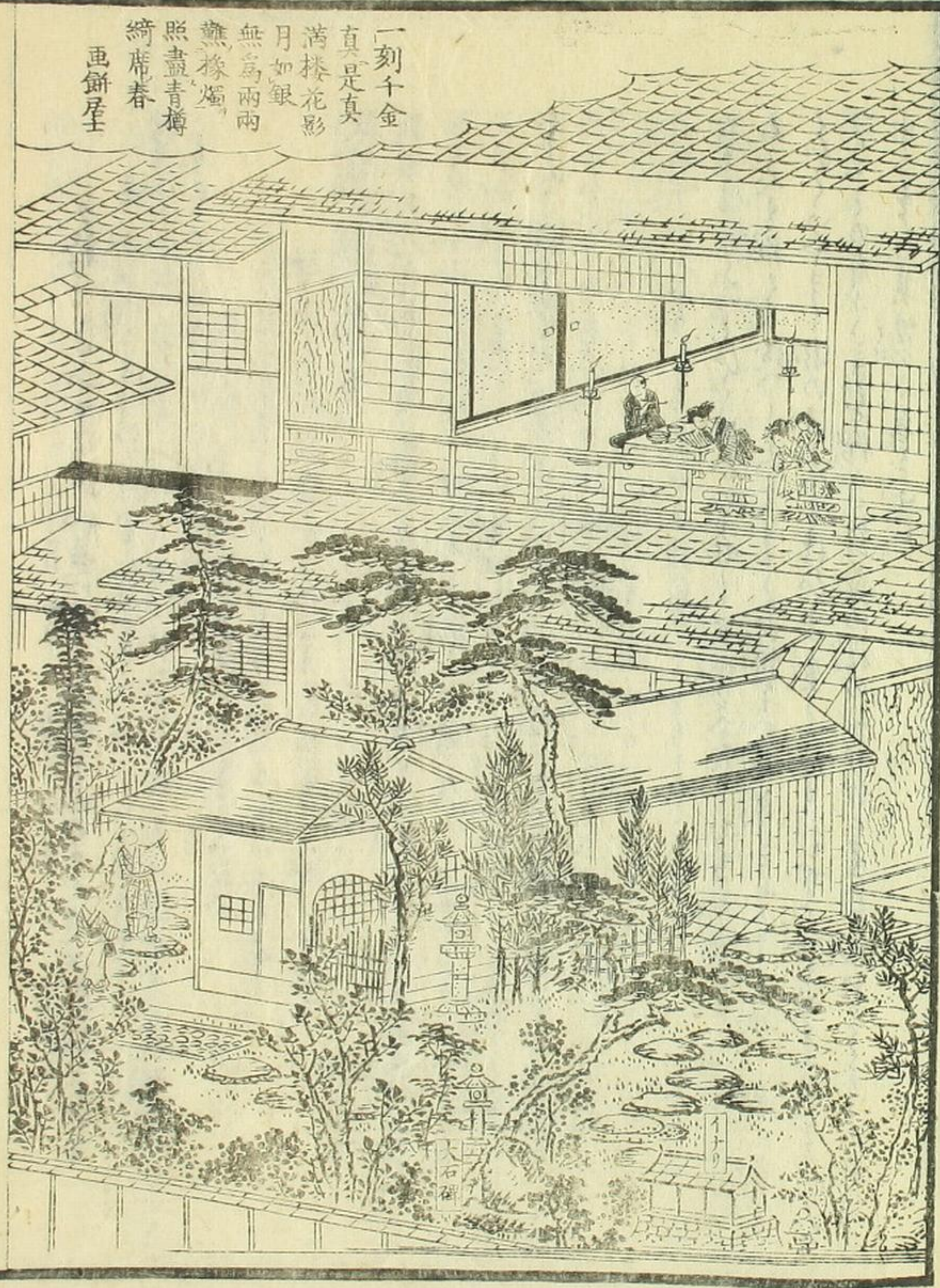
玉基是恋慕涙川

七言一首を筒書つて
其七言のころを愚按り古哥小三行流川絶ぬ涙のさせやも乱る恋の淵を有るるにその糸をさらせ川小見立すや又たわ井の流のころいかに雲井のさかやかり神の音小きつ恋のころかをよとふとをりて聞つてハ斯るもろしと重器すたひ有なきと受なきと小ありつひの女たわや殊ある所意あり寺機煙のありやや裡々この三弦を侍女小下し有たかも頂戴秘蔵する樂じつたもかゝる珠巻と見聞何とを懸望つた一我も小入る思ひより小音ひ彼家小園ありゆも小深く小やふびくささささ感れたるやや列の三弦と岸野小ふはのり々岸野の家つて入る秘蔵するは浅くは常箱小を測りたりと嘉例の初の舞きなり

玉の基も恋慕た涙川わが身を志づ先く逢津のありたる恋
小ヤンサ 捲むや恋小アタモチ せや村雨たちもやとさくら花枝ら

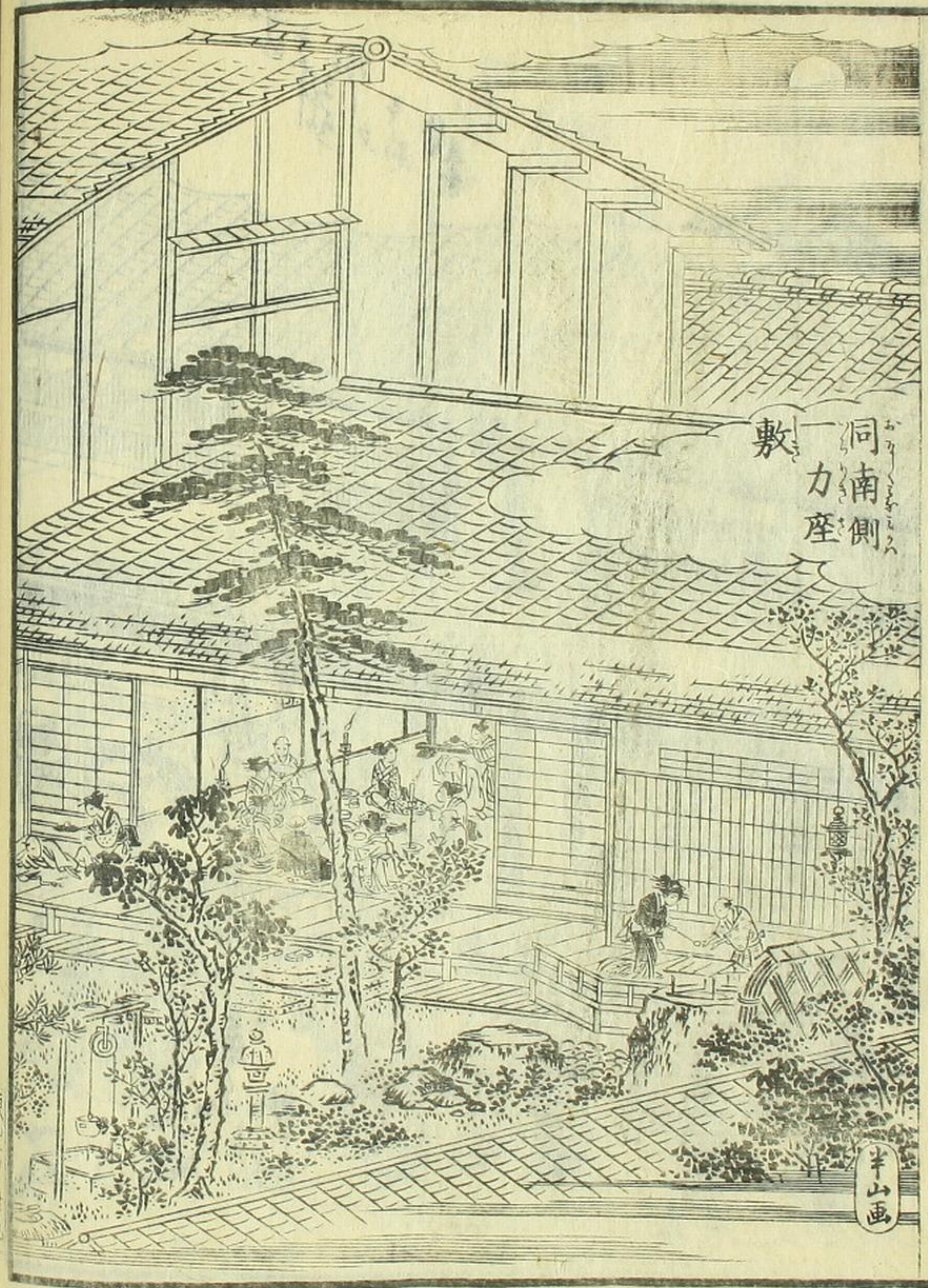


一刻千金
 真是真
 滿樓花影
 月如銀
 無為兩兩
 燕椽燭
 照盡青梅
 綺席春
 画餅屋



洞南側
 敷力座

半山画



右南北兩座の勾欄を祇園町同新地の繁昌の鴨東四時詞及び同註の
委しんが就く見らるる九年の紋日多き中もわき水無月の祇園
神輿洗五月晦日小娼妓の店々々々小婦の美貌を選びしむの姿小扮
大路を移る行是を透物や稱々遠近よく見物の集ると幾千
万人をも知は是浴東第一の壯觀なり其概略左の長篇貞々を爰に抄出以

祇園祭優行

太田賀象

百世不遷平安城四方鎮護多神明
皇家祀典存常格歲時享祭報昇平
土地城堙廟祝史祀事習俗各經營
就中鼎盛祇園會神輿奉迎夏五晦
擗舉丁壯幾千人祖裾裸體成一塊
闕宮直下至行宮勢如波濤帶颯風
遙并貴賤相蹂躪散擲青跌飛晴空
須臾巡行歸旅次此日狹斜綠鴨東
葛原之街及新地八百女間指掌中
許願還願娼妓輩祭優兩隊各競雄
如今大率如恆例有凶京北係治功

頭會拈錢供費用官吏何管訖凶豐
催促品類新趣向多擬演劇構奇工
年年歲歲趣相似歲歲年年扮不同
去年生且今年丑甲歲若姪乙歲童
此時牛廟靈鎖傍東西南北列貨牀
淮南雙亭當墟女邀客相妬鴛與鴦
觀者政立噴牆面躡躡肩摩動土崩
狡獪門外石梯下一望綺街至戲場
士女雜還塵煙漲驕陽時節勝艷陽
翠簾高捲千樓晚紅裙映日庖厨娘
婢姜玳梳者將落俯閱紙簿連綴行
已報前導行燈見柵陳收聲暫停鰲
前席簷端屏息娛遙聞先鳴倡樂起
隋宮剪彩移春檻爛熳牡丹回首視
一樣衣裳紅羅笠吳紵蟬殼香汗濕
緹絃繁手鉦鼓喧節奏淫哇聲習習
休道絲兮不如竹賞音誰又論及肉
肉味相忘三嘆餘響屨弓鞋逆拭目
漸入佳境麗人部金蓮步步無蹉跌
含嬌含態自舒遲標致由來皆殊絕

有脚芍藥活芙蓉芙蓉芍藥一何穠
西施捧心楊妃醉了鬢夾侍扶額容
有仍鬢髮金步搖百媚千妍筆難描
雷同犬吠呼所望飛燕掌舞迴細腰
不讓霓裳羽衣曲梨園女優輪妖嬌
摸倣秦王破陣看男粧抹顏如渥丹
慶氏鬪士應解甲角觝魚龍何足觀
伎罷整列次第遷輕羅小扇相擁扇
秋波斜寄稠人裏流眄多情在誰邊
豈別熟識兼生面心醉魂迷轉欲顛
行雲流水終無賴後進倡樂鼓填填
君不見東都諸侯八百街墨水夜遊
競豪奢千艘萬艦烟花戲光燒綠波
火似花又不見浪速菅祀稱繁華河
連燈船陸棚車檀持利兮聲霹靂豪
奢繁華又何加祇園倡樂麗人部風
流艷冶獨堪誇

更番扮戲喚呼頻品得妙年殊色人
後隊旋隨前隊去幾雙團扇拂炎塵

画餅居士

越羅縠積銀麟蹙錦團窠紫鳳翹
粧束戲衣嬌困甚香肌汗滴玉生煙

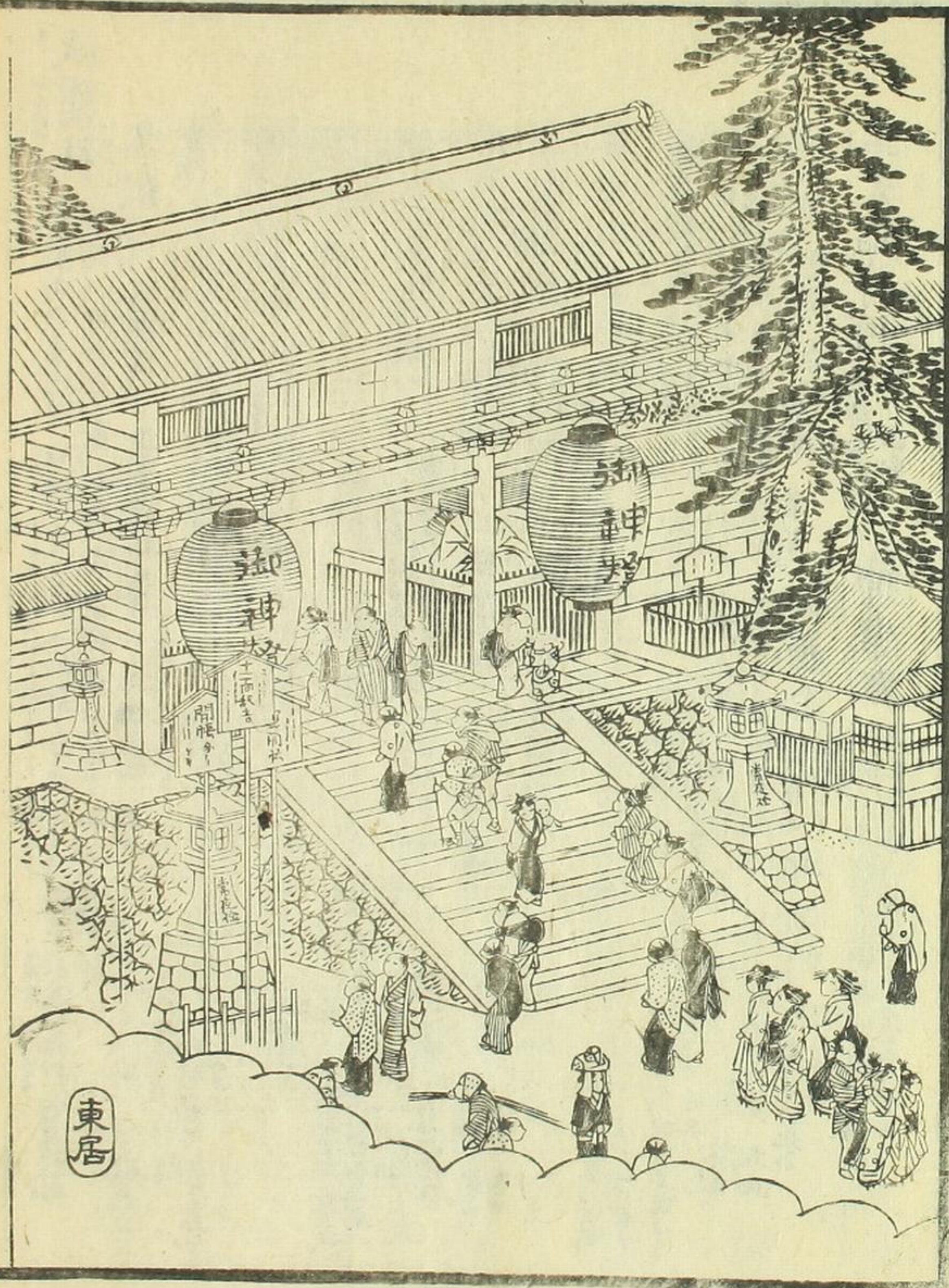
全

自注云祇園神會本日前後熱鬧亦甚矣五月晦及六月
十八日在鴨河四條橋東洗淨神輿謂之御典洗是日也
鴨東茶坊娼戶結夥醜錢戲翠翠裏香演雜劇戲文故事其
人物則扮娼妓爲淨且諸裝又纏結爲棚押其首尾衆則
有三絃胡琴提鼓鉦鼓細腰鼓每隊珠翠錦綺香純自紵
豔裝濃粧觀者每責責要不過勾引無賴子弟爲奇貨耳

祇園會のわりのまをくたふれふよ

野々
隆正

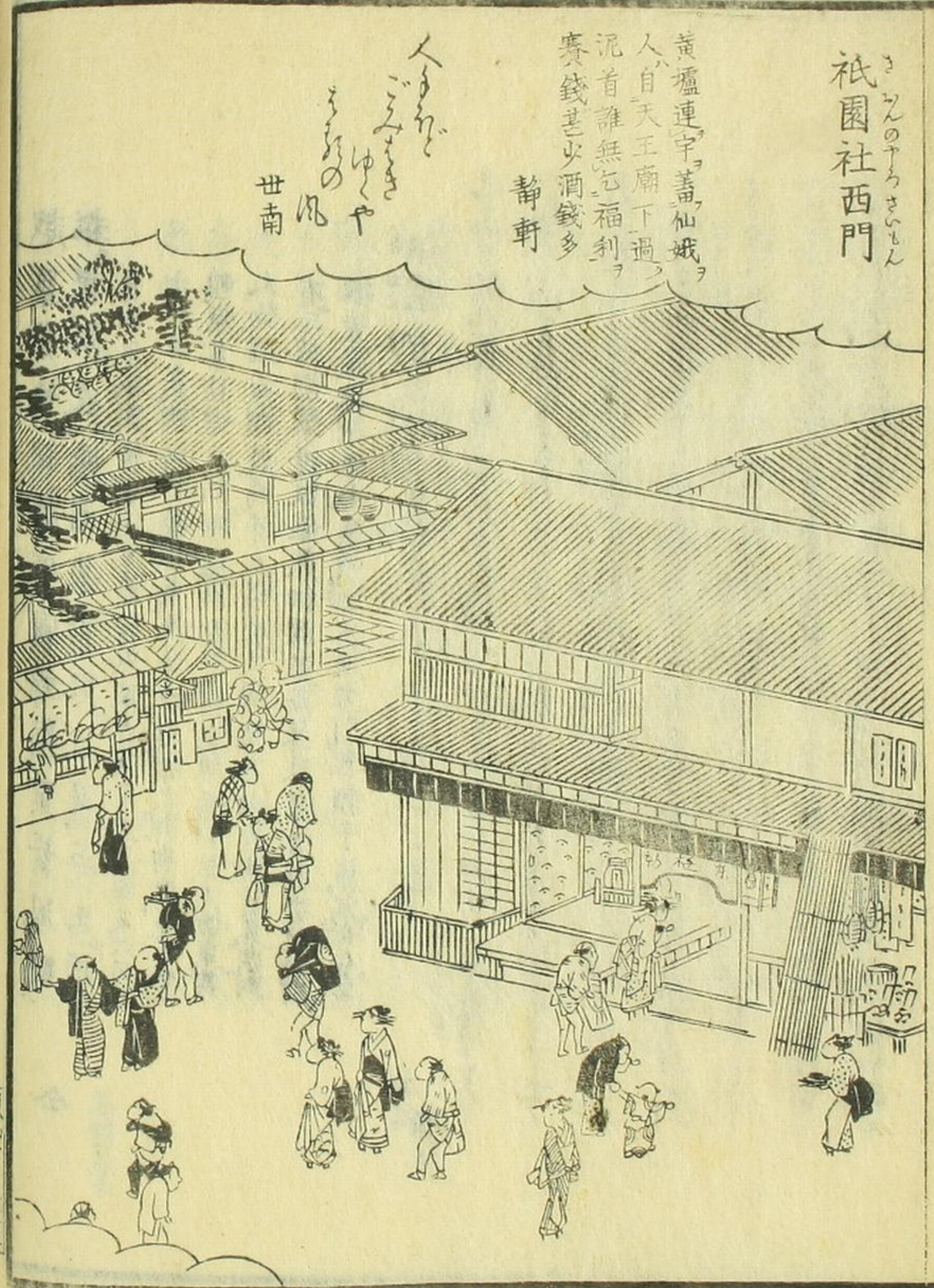
まろののちをさうかまはくおれさうあやのそはの
いろののちをさうかまはくおれさうあやのそはの
なまはくおれさうかまはくおれさうあやのそはの
まろののちをさうかまはくおれさうあやのそはの
いろののちをさうかまはくおれさうあやのそはの
なまはくおれさうかまはくおれさうあやのそはの
まろののちをさうかまはくおれさうあやのそはの
いろののちをさうかまはくおれさうあやのそはの
なまはくおれさうかまはくおれさうあやのそはの
まろののちをさうかまはくおれさうあやのそはの
いろののちをさうかまはくおれさうあやのそはの
なまはくおれさうかまはくおれさうあやのそはの



祇園社西門

黄壚蓮宇蓋仙娥
 人自天王廟下過
 泥首誰無心福利
 賽錢甚少酒錢多
 靜軒

人
 世南



祇園社 祇園町の東より、坂地の愛宕郡八坂郷に、社領百十石、社務執行寶壽院、社僧八坊、社司二家、本願一家、兼社一家、宮司二家、神樂座八家、

水殿 南向三座中央、素盞烏尊、一、牛頭天王、感神天王、武塔神、号、心牛頭天王、

東間 八王子、今若宮、素盞烏尊の御子、天忍骨尊、天穗日尊、天津彦根尊、天津彦根尊、

西間 稲田姫、本御前、素盞、鳥尊の御妻なり、獅々高麗狗、内陣あり、同、

拜殿 南向、中門、同、樓門、同、隨身の像、鳥居、南向、石柱、高、四間、二尺、圍、壹、大、壹、有、云、

山城名勝志曰、鳥居の額、始、近、藤、基、公、筆、跡、云、々、其、後、西樓門、四條通より、石階、十五段、

相光天王社 拜殿の西より、日光社、中門の内、東の方より、月光社、日西より、

宇賀姫社 兼師堂の西傍より、神明宮、宇賀姫社の向より、伊勢大神宮と、

龍徳稻荷社 太神宮の南より、辨財天祠、妙見社、共、稻荷社、惠美須社、西樓門の内、

蕪民將來社 西樓門の内、後見殿、本殿の良の方より、美御前社、本殿の東傍より、

攝社末社 本殿の後、南向、白鬚、大馬、八幡、松尾、天神、辨財天、多、春、日、

本殿東傍、荒神、能事、稲荷、御輿舍、東傍西、御供所、御輿舍の北、

惠美須、愛宕、毘沙門、神樂殿、拜殿の南より、北、向、御、立、雞、の、馬、

玉光稻荷祠、神輿舍の南より、西向、神樂殿、山、鷹、拳、の、筆、々、其、名、高、

御供殿 拜殿の西より、神馬舎、日、後、木、作、の、繪馬舎、本殿の西より、世、高、繪、

か、梅、神樂殿の北より、江、梅、の、名、木、

多寶塔 本殿の東より、二重の宝塔、重政年中、燃、失、今、六、年、跡、年、小、桜、樹、を、数、

觀慶寺 本殿の西より、本尊、藥師佛、立像、六尺三寸、服士、立像、二尺七寸、

當寺、貞觀年中、圓如上人の草創、五、六、代、陽成院の勅願所也、

美平五年六月十三日、觀慶寺を以て、定額の寺、始、法相宗、

後、天台宗、改む、慈惠僧正中興、縁起、小見、平、寺、縁、起、云、觀、慶、

愛染堂 兼師堂の向より、元三大師堂、兼師堂の北より、本尊、大師の像、三、尺、余、服、士、不、尊、

抑當社、入皇四十五代、聖武天皇、天平五年、吉備大臣、唐土より、帰朝、の、ま、

播磨國、廣峯、小、垂、跡、崇、奉、其、後、常、住、寺、の、十、禪、寺、圓、如、上、人、小、

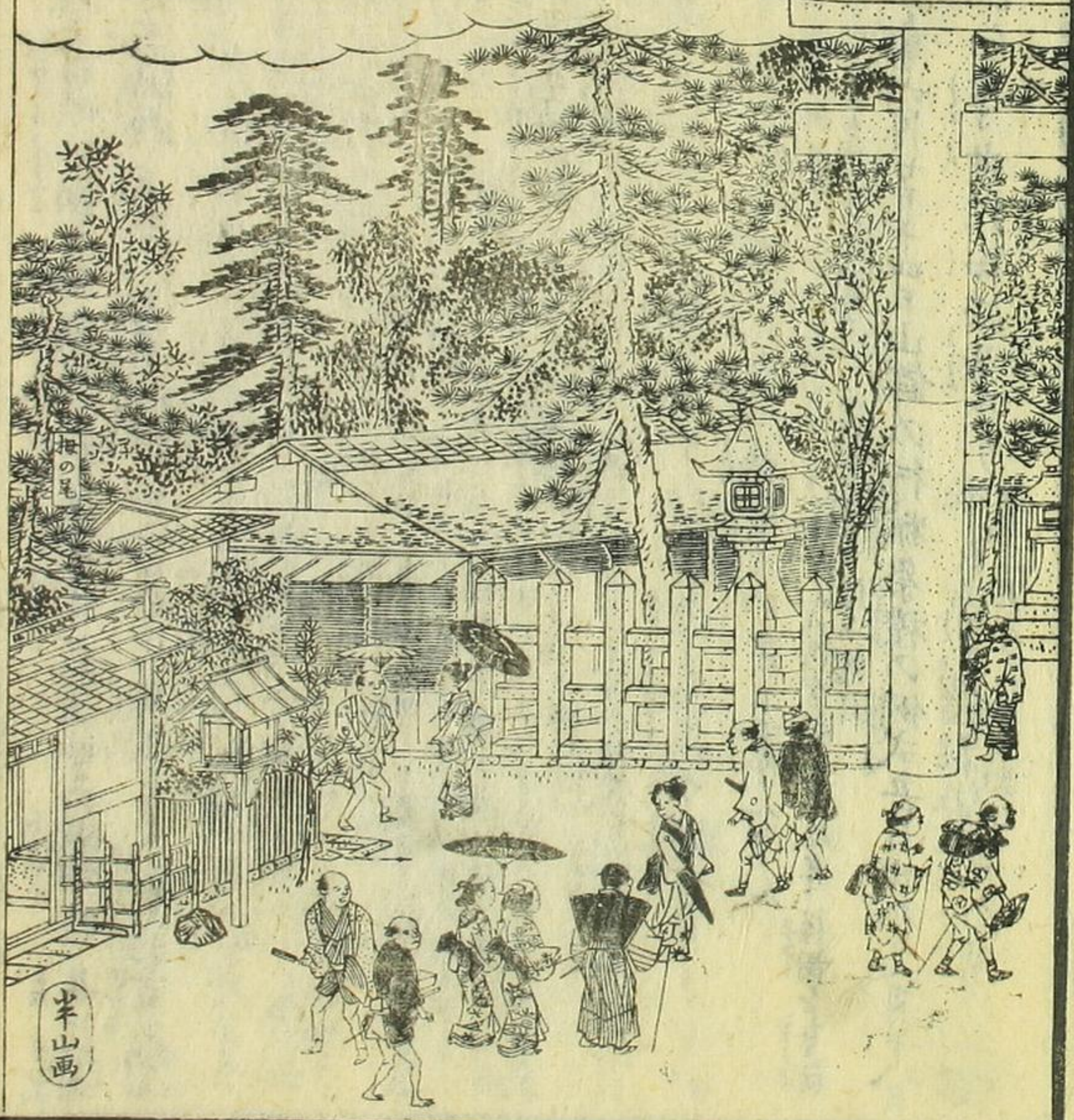
神託あり、帝城守護のため、貞觀十年、以、八坂郷、感神院、小遷座、給、

同十八年、疫神、崇、奉、を、世、人、疾、小、服、む、以、の、外、を、累、祖、部、日、良、

麻呂京中の男女を、卒、六月七日、十四日、疫神と神泉苑、小送、其次、年、又、

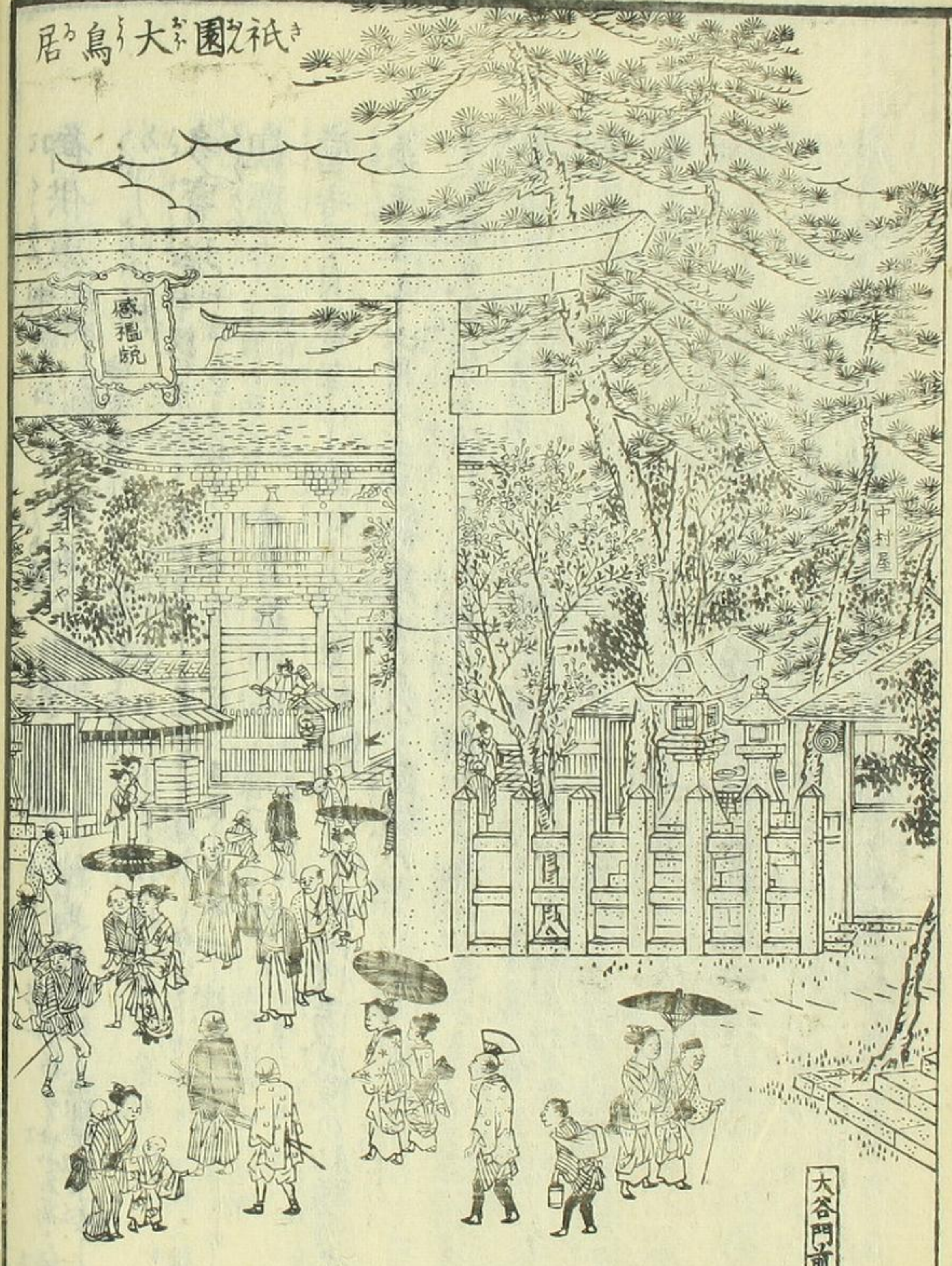
織手鳴刀各慣也
 店頭菽乳照紅裳
 輕輕弗得技梭整
 三尺泥爐爇雪香
 中島規

けり
 新のつゆを
 肉あはれ
 喜の神の考
 芳樹

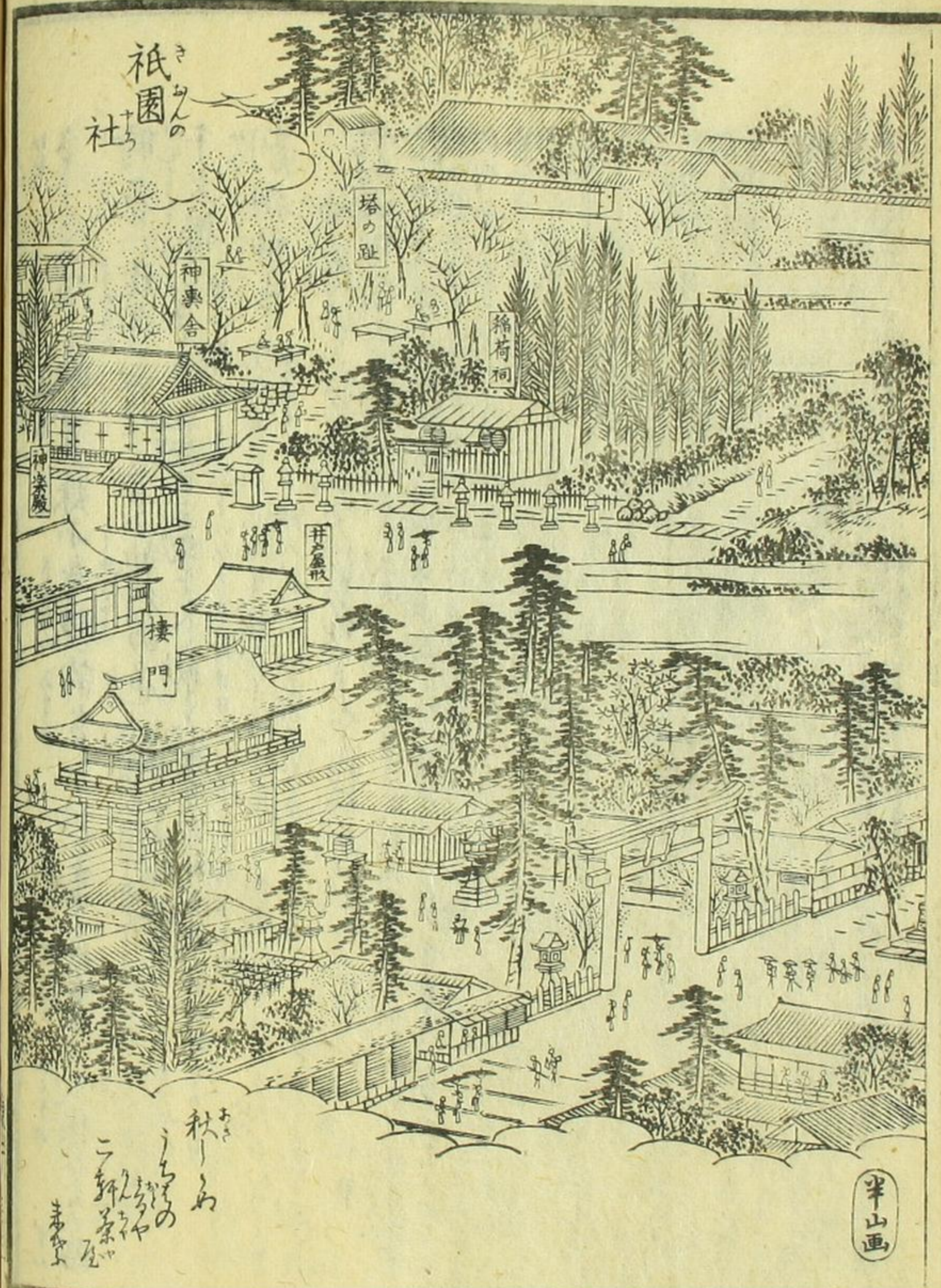
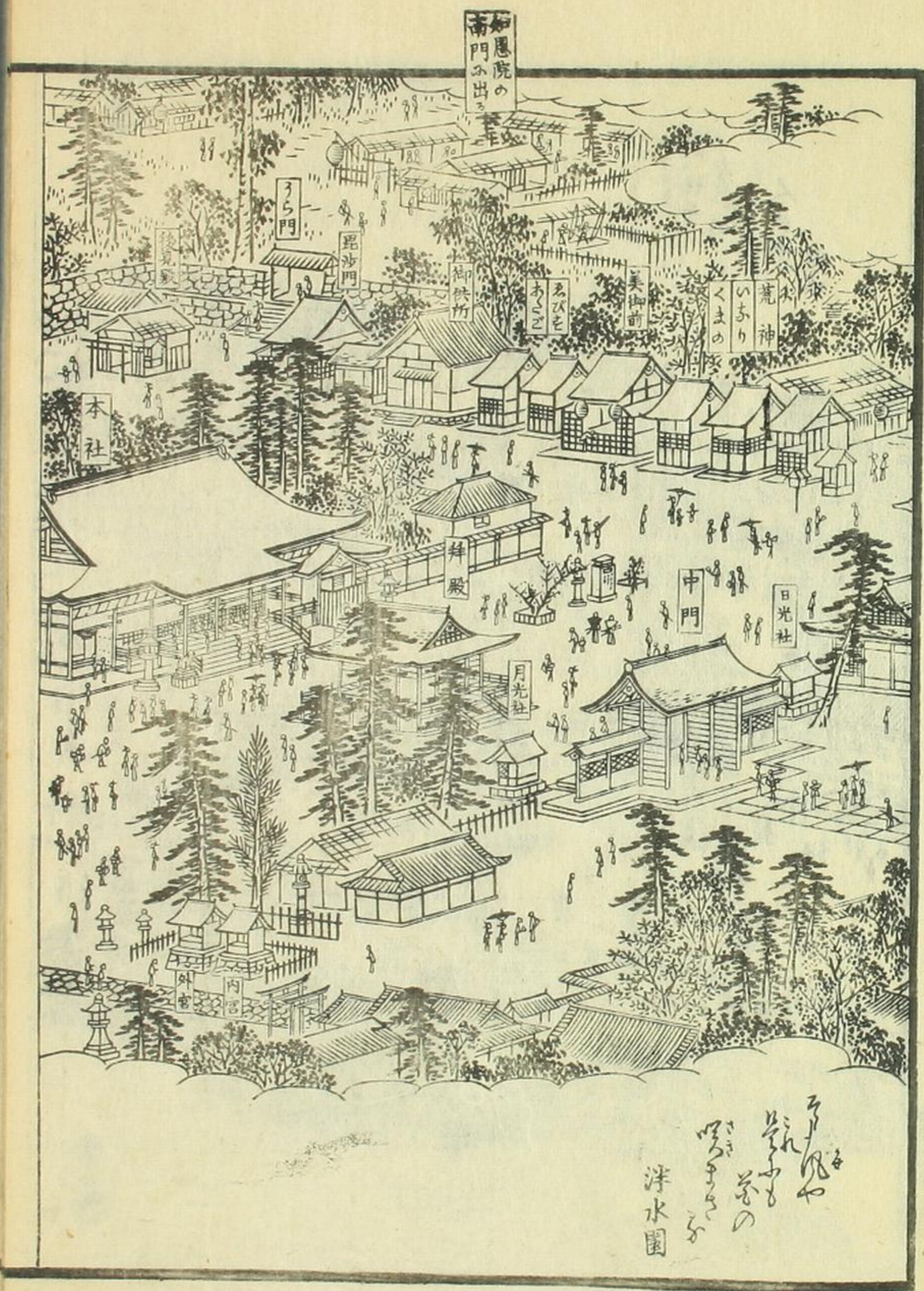


半山画

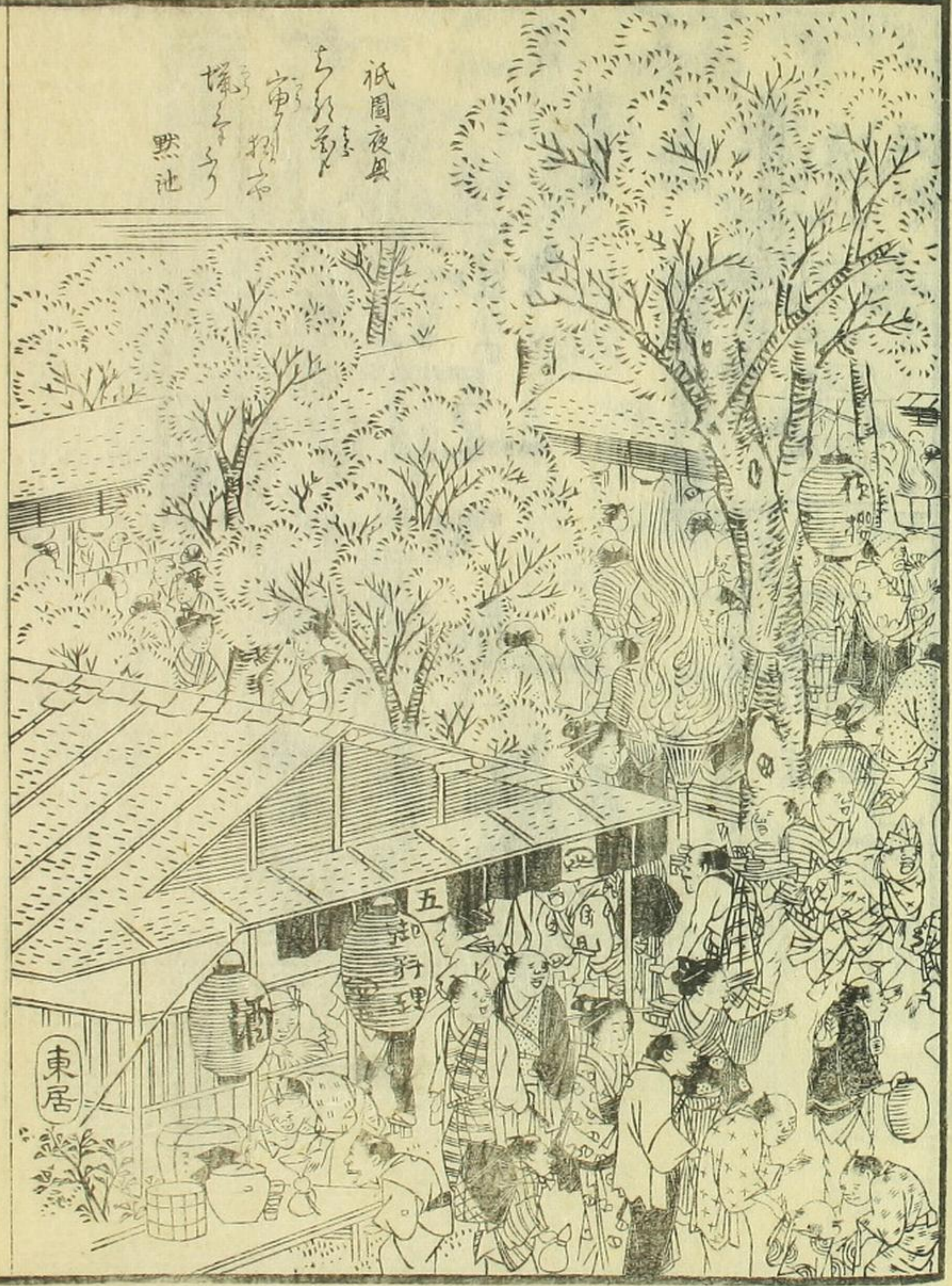
居鳥大園祇



大谷門前

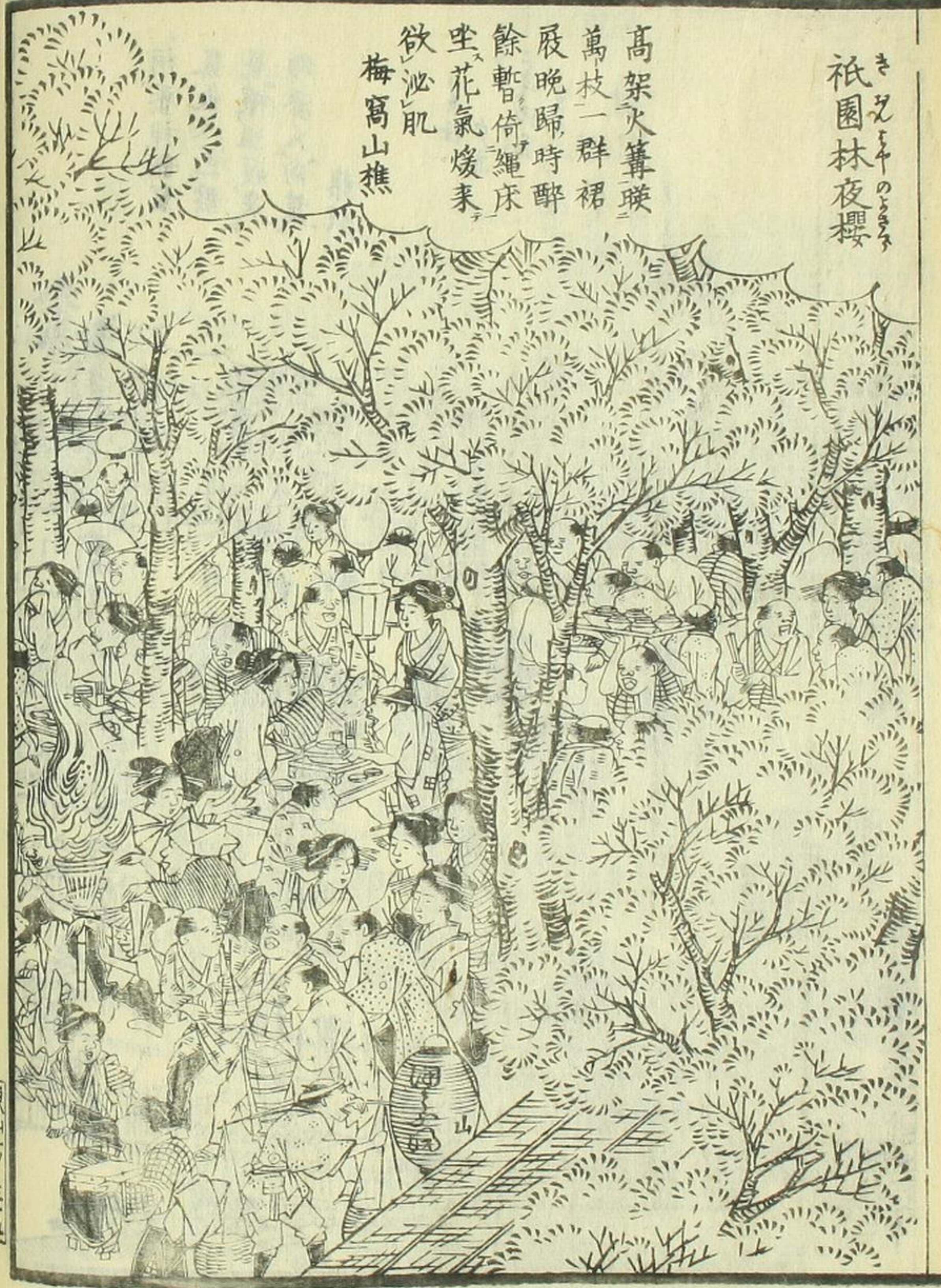


祇園夜具
 六甲
 樹石
 黙池

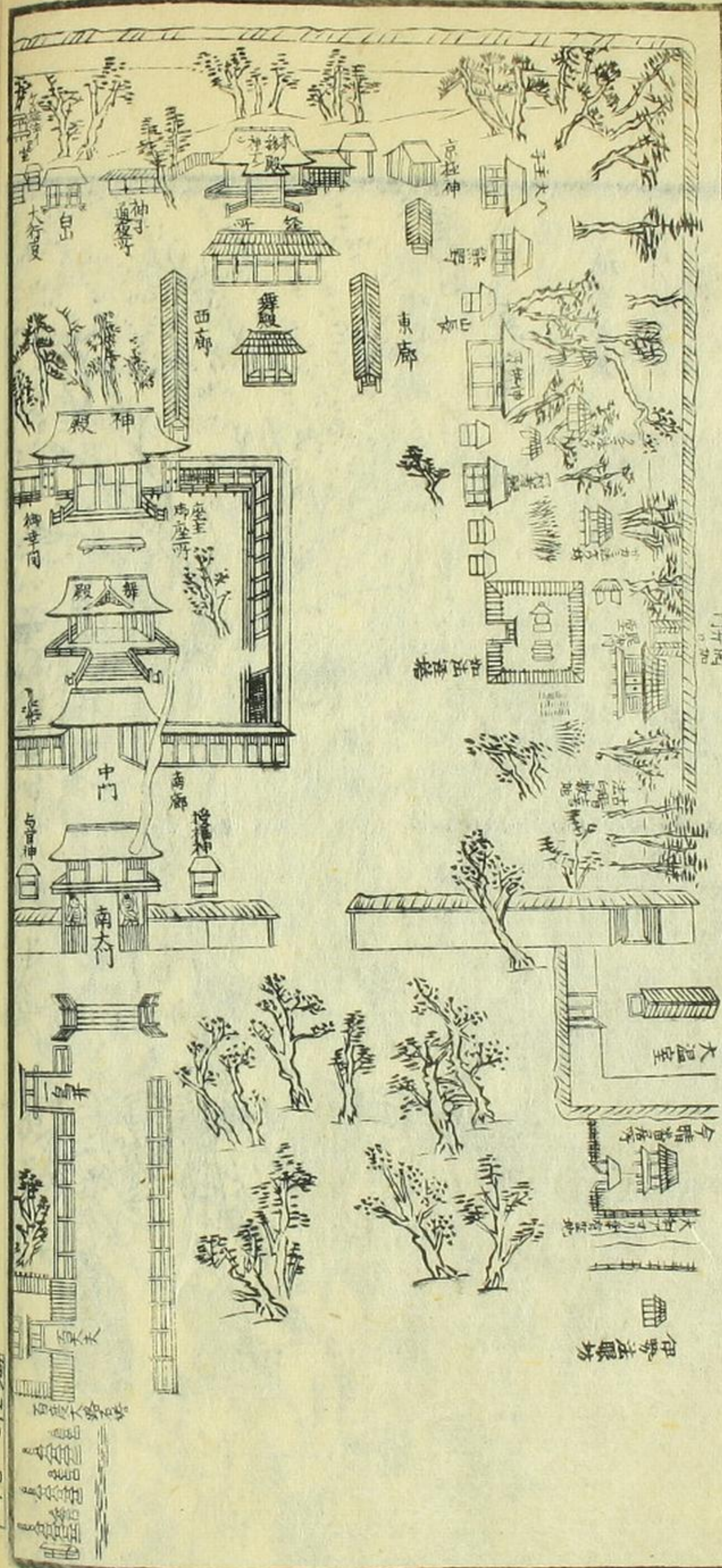


祇園林夜櫻
きんぎょのりょうりょう

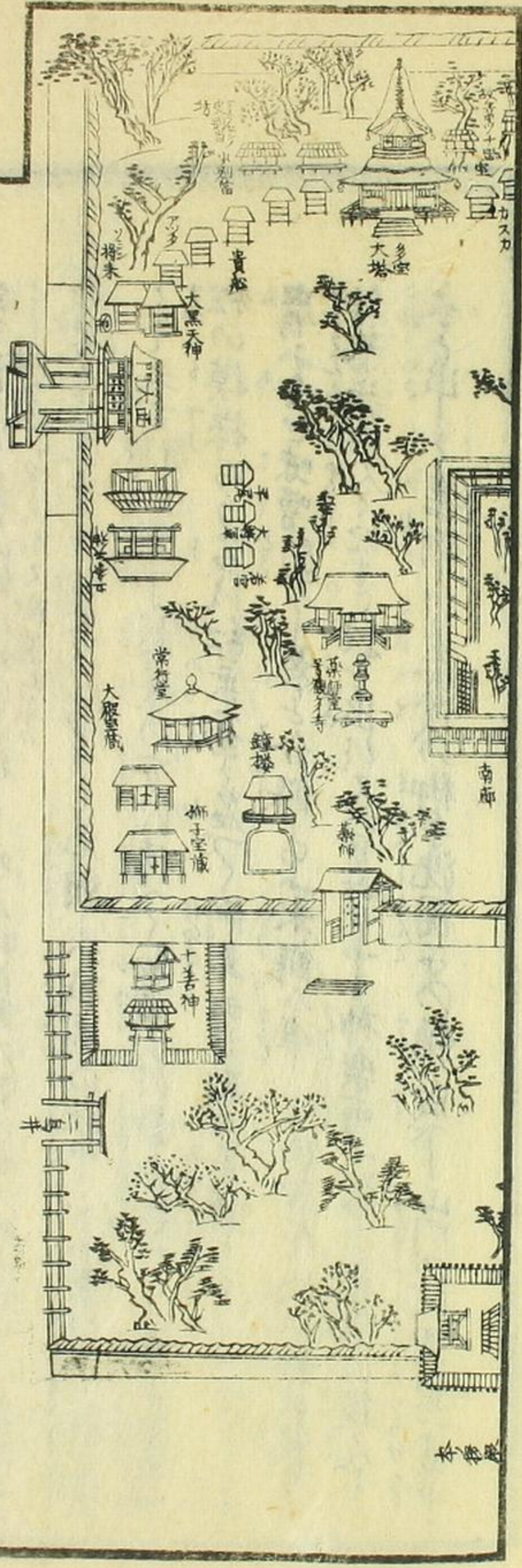
高架火篝映
 萬枝一群裙
 展晚歸時醉
 餘暫倚繩床
 坐花氣煖來
 欲泌肌
 梅窩山樵



寛和年中祇園社古圖



真彦縮摹



山城國愛宕郡八坂御社繪圖

寛和貳年丙戌十月

出別當法印敬覺 大繪師法眼圖念

石御妻書也

正安四年 實十月六日奉摹造

筆者 後六位下柏幹傳

行幸子八

右圖中小記より所を縮寫し

祇園北林

社頭の北のやへ雑木林なり今ハ彼岸無 殺珠と極 花のひびく一府受託をりこの
杖中馬の馬場大弓の射切揚弓赤栗飯の具食家等行きまあり遊客常一群
集い暑熱をとり涼風を感ず近手坂所をひらき勸進大相撲を興行大お流仍せり
月夜の日流より馬の調練酒食の夜をゆるぎ遊用ひて寝小推估無用し敏昌の地くさ
二軒茶屋 社頭の浦秋鳥居の内より其遊船ハ年感久遠中 詳小志れくワヤハ
一軒より一が慶長のころ東側あり東西西翼の 故二軒茶屋より西と藤屋や
少東と中村屋と 蓋布葺の火掃掃前つちり 諸人を招き憩せり名物の湯豆
腐田楽とて酒飯とてむ且需小應ト 河海の鮮魚とて調味し出ば又清水とて
以て茶客の懇望より大ささの美と梅柳小橋とて 相味し出ば又清水とて
幸小ささ田楽の其力の心体又類ひしむ 城崎の墨とて 茶客の眼前小ささ 豆腐と切
り尚書のみめり又桂景なり

二軒茶屋

此茶店往昔の例今にあり元朝ハ祇園の社中へ小来つて王服を
とぞ又古代の籬子藤屋の方に傳へ秘蔵し最吉物や 胸小紅葉唐
松の模様より名氏紅葉金と名づ例年六月朔日炙餅を串ふささく豆
腐小合せ味噌引く是と合餅とて水餅小准しものおんく此日餅の兒の
外参詣の人々はこれを出り又六月六日ハ神樂所おつて祭儀の役人
之と出く嘉例ハ是加茂の御手洗團子の類成下 山門の阿闍梨一夏中

祇園梶子

享保の初祇園林ハ茶店をかまへ 往來の人を休め茶と菓と兼あり名を梶と
より容積おつて美観し幸に紅粉と施し衆人目を送らむかりしと 生實和音と好む
善其其家の集い梶の葉より十四年より年の暮に歳暮恋よりととあり
又秀逸し人口にあり夜敷しつて燈なり

繁柯中斷

葛原 西林店 深深 相對齊 中嶋規
破卵 醉人來 最早 露菴 猶傍 葦簾 啼

淋

淋しき流るる水 流るる水 流るる水 流るる水

下河原

祇園大鳥居の正面條をより 同流の茶店揚弓高樓の貨食家建つてあり奇舞
の妓婦花や小雀色ハ碎若街にほひく若衆とて

此地

雲居寺 今の高臺 寺北地 北より谷川流と出く一面の河魚をり驟雨の

時へ満水一々下流して宮川と号し鴨川も流と介が川の程ふ山
崩れ川を埋て今の如く高樓飛觀軒と云々奇舞の街風り
此迎瀆本或は南北の川の孔雀樓と云々一説云下河原の名義は此地の東
真席多し今ハ廢れ梅の尾本ハ頗る盛ん也
北の地の高き亦ふ高き原の有ふ對して下河原といふ意なり下既
小山科の四宮河原といふ四宮のある地の有原といふ意なり四宮原
るべ彼小関より流る小川といふ河原と名ふべき以下河原あり
由言傳ふ字に説く説く下といふ何れも是なり後人尚考ふ
其角
關更
全
道彦
梅室
梅巖

百度大路

祇園社より南下河原牛王地社迄の間を号し此名古書に見たり祈願者先本社詣り
彼社詣り行む事百度は是を百度大路と云然れ祈願必成就と云牛王地社第三の春に出

神幸道

大鳥居の前と西小至る道路といふ祭禮の時神輿鳥居を出て西小行なり
北より西樓門の前より出ると祇園町を西へ四條の御旅所を度御あり

山王社

右神幸道の北側より南向の社の傍に三木の像を安置し俗に山王社といふ
以上三軒茶屋以下八四条以南より有るは本社に隷するといふ美に記し餘り不

此社ハ往昔山王より禁庭ふ濫訴の事あり時ハ日吉の社の中何れの御
輿より大衆等早出しく大内ふ奉り是は振奉るれと御輿振ると訴

の望小達せざれば神輿を捨置り歸山に其事度々及ぶ或は神輿を
祇園の社小移さばと云ふ此所置奉るなり故に捨山王といふ

出平家物語云去保安四年四月小神輿入洛の時座主小仰せ赤山社入奉る
又保延四年七月小神輿入洛の時祇園の別當小仰せ祇園の社入奉る今度

保延の例たふとして祇園別當權大僧都澄憲小仰せ秉燭ふ及今祇園の社入
奉る云辨財天祠稻荷祠妙見祠西樓門前南傍あり何れも近來の建管成へ

疫伏社

祇園西樓門の外北の町西側より傳云疫神小祈願する時疫の疫病を免るるゆふ
疫鬼降伏の神ありと云ふ名けの宮あり有卦小入る人多く奉詣り其故と云ふ

一説云元山伏宮より浄藏貴所と祭る所ありと云
昔ハ法螺と板小置き繪馬の代り
社さげし今ハ其支那山伏と

瘦伏やせふ和語相似わごころにちがふ 又云此所このところ昔文覺上人むかしぶんかくしやうじん行齋ぎやうさい平家へいけと咒咀しやくしやく所ところあり

華頂山知恩教院くわてんざんちしんけういん 祇園ぎげんの東北きたひがし浄土宗じやうとそう根本寺こんぽんじ中なか四箇しつかんの本寺ほんじの隨したが一いつなり

本堂ほんだう南向みなみむかひ圓光大師えんくわだいし影像えいざう大師だいし御ご自作じやくざ座像ざざう長凡ちやうぼん二尺にせき三寸さんすん許ゆる厨子ちゆうし小安せうあんは

勅額ちやくがく大谷寺おほやぶじ 賢けん額がく 後奈良院ごならいん宸翰しんぱん 東殿とうてん檀だん 彌陀やだ三尊佛さんそんぶつ 立像たつざう三尺さんせき二寸にすん許ゆる厨子ちゆうし小安せうあんは

供奉くわんぷの作しやく圓光大師えんくわだいし 釋迦佛像じやくぢやうぶつざう 堂だう後小國ごこくの繪え所ところ 善導ぜんどう大師だいし像ざう 長三尺ちやうさんせき二寸にすん許ゆる 自作じやくの像ざうなり

神かみ愛あい不思議ふしぎ佛ぶつ舍利せり 堂だう内うち小安せうあん置おき舍利塔せりたつ黄金わうきんの記き小見せうみたり

阿彌陀堂あみだだう 本堂ほんだうの西にしの傍かたはらあり 東向とうむかひ舊ふる東とうの山上やまの上 本尊ほんそん阿彌陀佛あみだぶつ 座像ざざう長三尺ちやうさんせき二寸にすん許ゆる 厨子ちゆうし小安せうあんは

四天王しやうてんわう 旧堂ふるだう内うち安やすの多門たもん持国ぢこく增長ぢやうぢやう廣目くわうもく小是せうし又また義山ぎやま上人じやうじん享保かうほ三年さんねん小寄せうぎなり

古墳こふん無銘塔むめいたつ 阿彌陀堂あみだだうの北きたより五輪ごりんの石塔いしだつ高たか九尺くせき五寸ごすん地輪ぢりん方三尺はうさんせき五寸ごすん何なにの人の為ため

開山かいざん相さう別べつ鎌倉かまくら鎌倉かまくら寺じ心しん證じやうの墓むらなり 元もと太子堂たいしだう當山たうざん小安せうあんは 昔むかしハ彼か思し月げつハ太子堂たいしだうより僧そう来きた

一説いつせつ小此塔せうしだつ上東門院じやうとうもんいんの御塔ごたつなり 又また上東門院じやうとうもんいんハ一條帝いちじやうていの中宮ちゆうぐう藤原

彰子ちやうしと申まを撰せん政道せいだう長公ちやうこう女によ兼保かみほ元年げんねん十月じゅうがつ七日にち薨かうハ大谷おほやぶ本院ほんいん小葬せうざうなりと云

早稲田大学図書館

011688995860